



地域人材育成研究

4

特集：各地の高校魅力化プロジェクトを紹介
奥尻高校の町立移管と高校魅力化（下）

編集・発行：地域人材育成研究会

地域人材育成研究会

わたしたちが考える地域人材とは、若者、ばか者、よそ者の人材であり、かつ Think locally, act regionally, leverage globally. ができる人材です。そのために学校が出来ること、しなければいけないことは多いと考えます。

地域人材として従来、語られてきたのは、若者、ばか者、よそ者でした。人によってこの謎めいた言葉の解釈は異なるのですが、わたしたちは、若者とはエネルギーがあり、古い習慣に囚われない者。ばか者とは地域の見慣れたもの・忘れられたものを地域創生の資源として活用する人、よそ者とは外部から地域を見る視点をもちさらに外部の人との繋がりがあの人だと考えています。

Think locally, act regionally, leverage globally. は現地で考え、地域の実情にあわせて行動し、グローバルの仕組みを活用しようという意味だと考えます。

わたしたちはみなさまと協働で、若者、ばか者、よそ者の人材、かつ Think locally, act regionally, leverage globally. ができる人材を育てることを、研究したいと考えています。



北海道奥尻高等学校





『地域人材育成研究』第4号の位置づけと使用について

『地域人材育成研究』第4号は、第3号と同じく町立移管して地域と高校との協働によって、高校づくりと地域づくりをパートナーとして行っている北海道奥尻高校と奥尻町を特集します。本報告書は中学生と保護者の皆様には奥尻高校やその他の高校魅力化を行う高校を受検する参考資料として利用していただけると幸いです。行政と高校、地域の皆様には、高校魅力化推進の参考資料として利用していただけると幸いです。『地域人材育成研究』の研究上の位置づけは、地域人材育成研究会が行った調査のデータを速やかに公開しアーカイブ化することを目的としています。研究者の皆様には、研究の資料として利用していただき、また、ご意見をいただけると幸いです。私たちは今後、本号の内容をもとに研究を進め、成果を公表する予定です。

最後になりましたが、『地域人材育成研究』の著作権の全ては本研究会に帰属します。ただし、出典を記載してあれば、本誌の一部または全部を、印刷物か電子データかの形式を問わず、複製や改変や再配布することができます。本誌をみなさんでご活用いただけましたら幸いです。

ただし写真に関しては、写真を抜き出して複製や改変して利用する場合には、北海道奥尻高校と奥尻町、奥尻町観光協会の許可を得ることを条件といたします。本誌に使用されている写真は、奥尻高校及び奥尻町、奥尻町観光協会から提供を受け、本誌での使用の許可を得ています。

Print ISSN 2435-3604
Online ISSN 2435-3612



地域人材育成研究 第4号

2021年6月
編集・発行：地域人材育成研究会

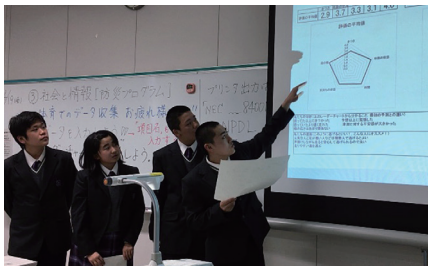
特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化（下）

青山学院大学 樋田大二郎・日本女子大学 樋田有一郎

- 6 設置者移管と地域住民による内発的高校改革
——奥尻高校の町立移管から高校魅力化の地域主義的転回を考える——
- 16 報告⑥ 町立への移管の実際と住民の奥尻高校への想い（奥尻町教育委員会）
- 35 報告⑦ 町の課題に基づいた高校魅力化との協働（奥尻町役場水産農林課）
- 56 報告⑧ 地域学校協働への役場の期待
——産業の変化と教育の方法・目的の共有化——（奥尻町役場地域政策課）
- 75 報告⑨ 島の観光産業の変化と島唯一の高校（奥尻島観光協会）
- 82 報告⑩ 東京でカフェ巡りの生活をして奥尻でカフェを開店（カフェ・ファード）
- 95 調査概要
- ※以下 『地域人材育成』第3号に掲載
- 6 特集 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化（上）
まなびじまの町立高校・奥尻高校の町立移管と高校魅力化
——地域主義的転回と地域学校協働の交点で起きていること——
- 14 報告① 町立に移管した高校に着任して考えた課題と方針——全国募集と地域との協働——
- 34 報告② 町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと
（一）経緯、教員集団の変容と教師の成長
- 44 報告③ 町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと
（二）プログラムの意図と開発過程、内容
- 59 報告④ 町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと
（三）奥尻高校の根底にある考え方
- 69 報告⑤ 生徒は奥尻島の町立の高校魅力化で夢を実現することを選んだ
町立移管が示した高校教育の地域主義的転回——奥尻高校の実践から見える高校魅力化の意義——
- 102



地域人材育成研究 第4号

2021年6月

北海道奥尻高等学校

〒043-1402

北海道奥尻郡奥尻町字赤石 411-2

地域人材育成研究 第4号

特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化（下）

青山学院大学 樋田大二郎・日本女子大学 樋田有一郎

インタビューは二〇一九年九月二日・三日・四日の三日間に青山学院大学教授・樋田大二郎が行った。インタビュー対象者と場所は下記の通り。インタビュー内容はあらかじめ大項目を設定した半構造化されたインタビューであった。

下記のように多様な人にインタビュー調査を行ったが、その理由は、地域では、地域の多様な要素が複雑に関係しており、一部を取り出して考察すること、地域の生態系の一部を取り出して地域を語ったり、地域の処方箋を書いたりすることは適切ではないと考えられるからである。

『地域人材育成研究』第3号

- ① 奥尻高校 清水信彦校長、
二〇一九年九月二日、於・校長室
- ② 奥尻高校 井上壮紀教頭、松原聡史教諭、
清水信彦校長
二〇一九年九月二日、於・校長室
- ③ 奥尻高校生徒 北野宏志（仮名）、海野友美（仮名）
二〇一九年九月二日、於・奥尻高校図書館

『地域人材育成研究』第4号

- ④ 奥尻町教育委員会 桜花幸久事務局長
二〇一九年九月三日、於・奥尻町教育委員会
- ⑤ 奥尻町役場水産農林課 満島章課長、横田稔主幹
二〇一九年九月三日、於・奥尻町役場
- ⑥ 奥尻町役場地域政策課 幅口一路主幹、羽立仁主幹
二〇一九年九月三日、於・奥尻町役場
- ⑦ 奥尻島観光協会 井口和弘事務局長
二〇一九年九月四日、於・奥尻島観光協会
- ⑧ カフェ・ファーク 禿あゆみ氏
二〇一九年九月三日、於・カフェ・ファーク

調査対象者

※インタビューは地域人材育成研究会代表・樋田大二郎（青山学院大学）が行い、テープおこし後にインタビュー対象者に加筆訂正を行っていただき、さらに樋田が整理を行いコメントを付した。
※個人情報保護等の観点から、名称・地名等について、一部加工して掲載した。
※お忙しい中、インタビューにご協力いただいたみなさまに感謝いたします。

論考

設置者移管と地域住民による内発的・高校改革

——奥尻高校の町立移管から高校魅力化の地域主義的転回を考える——

日本女子大学 樋田有一郎

キーワード：高校魅力化、町立移管、地域主義的転回、町立移管費用、まなびじま奥尻、全国募集、内発的改革、分枝化型、運営面地域連携型、設置者移管型

本記事では町立移管がどのようになされ、高校と町にどのような力を生み出すのかを考える。

生徒数減少を前にして予め用意されている規準によって自動的に高等学校の統廃合を行うのではなく、岐阜県や島根県のように「再編整備を行う前に高校の活性化を優先する方針」が示される事例が出てきた（屋敷二〇一九、本多二〇一九）。『地域人材育成研究』第3号が報告したように奥尻町立北海道奥尻高等学校は、廃校化される前に地元の県立高校を町立に移管して地域高校協働によって高校を魅力化・活性化した事例である。『地域人材育成』第3号及び第4号は訪問インタビュー調査で得られたデータから、地域との協働による高校の魅力化・活性化の背景と内容をなるべく具体的に紹介しているが、本稿では先行研究を中心に必要に応じてインタビューデータを用いて、町立移管

に焦点を当て町と高校が連携し両者が主体化・自律化して活性化する背景と過程を検討したい。

1 町が存続の主導権を持つ

内閣府「まち・ひと・しごと創生基本方針二〇一九」（令和元年六月二一日閣議決定）は「地域において地域ならではの新しい価値を創造する人材や、グローバルな視点を持ってコミュニケーションを支える地域のリーダーとなる人材、専門的な知識・技術を身に付け地域や産業界に求められる人材等の育成」を行う観点から市町村が高等学校の運営に参加することを推進する。

高等学校は多くの場合が都道府県または私立により設置・運営がなされているが、地域に必要な人材を育成する観点からは市町村が学校運営の重要な意思決定に関わることが重要であるため、高等学校を核とした地方創生に取り組む高等学校の学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の委員に、市町村長又は市町村教育長等の参画を促進するなど、実質的に市町村が高等学校の運営に参画できるような協働体制の構築を推進する。（内閣府 二〇一九）

奥尻高等学校の町立移管は、全国の地元地域の高等学校改革を進めようとする市町村にとってモデルとなりうる挑戦である。たびたびモデルとされている島根県の「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」との比較では、島根県では設置・運営のうち設置の部分で県立の位置づけを変えずに、運営の部分で地元行政や町民が財政的支援および人的支援の参加度を高めて魅力的な高等学校を作ろうとしているのに対して、奥尻高等学校は設置者を道立から町立へと移管した結果、まさに町の高等学校となった事例である。

奥尻高等学校が町立移管を行った大きな理由は「学校の存続を北海道に委ねるのではなく、地元が主導権を持ちたい」（干場二〇一七）ということであった。これに加えて本研究会の奥尻町教育委員会事務局局長の桜花氏へのインタビューでは、町立移管が当時の町長主導で決まったこと、背景には存続の心配がある高校では生徒が集まりにくいという考えがあったことが語られている（『地域人材育成研究』第3号）。

2 町立移管の費用

島根県の高校魅力化では町立移管をしないので町立移管に伴う費用負担は不要である。しかし、島根県の事例では、町は県立高等学校への支援として毎年、コーディネーターや支援員の人的支援、スクールバス支援や各種事業支援を行っている。これとは別に寮の建設と運営を支援する町もある。

青森県の五戸高等学校が町立移管を断念したのは財政負担が大きかったためだと報道された（山本二〇一八）。われわれは、五戸高等学校との比較から、なぜ奥尻高等学校では財政負担が可能であったのかに興味を持った。そこで、奥尻町教育委員会事務局長の桜花氏に高等学校を町立に移管する費用を尋ねたところ、北海道からの支援策として、建物（学校、校舎、土地）、教職員住宅、物品類が無償譲渡されていた。人的支援では、道が最初の三年は教員二名、職員一名、その後の二年は教員を一名単独で加配している。さらに施設等の支援という趣旨で道から二一〇〇万円を補助されている。人件費については、高等学校の人件費は交付税措置される。教職員人件費は一億一千万円くらいで、だいたい九〇〇〇万円ぐらいの交付税が入るので、町立移管で年間二〇〇〇万円くらいが町から支出される。費用負担が大きい松風寮（寄宿舎）建設については、当初予算で一億四二〇〇万円であった。

なお、徳久（二〇一八）によると町立移管の際に教職員の身分等の保証が課題となったが、道教委が割愛人事を認めたことで解決した。

道教委は、奥尻高校に赴任する教員の身分を赴任期間のみ町職員に移し、転出の際に道職員の身分に戻す割愛人事を認めた。つ

まり、奥尻高校の教員配置はこれまで通り道教委が担うとした。
 ……各種研修についても、費用負担は町がおこない、道の研修を
 利用できるとした。奥尻高校の赴任を他のへき地高校と同等に扱
 うことで、町立高校教員になることの不利益を回避している。給
 与等の身分保障は町の所管になるが、町は従前と変わらぬ水準を
 保障している。(徳久二〇一八・一九一―一九二)

3 まなびじま奥尻プロジェクト

これまで奥尻町では住民の間には、経済面でも社会面でも、奥尻高
 等学校は人材育成（地場産業の後継者育成や地域活性化）に貢献して
 いないという不満があったとされる。その背景には高等学校と地域と
 の間に「距離」があったことが指摘されている。

奥尻高校は地元でありながらも、地場産業の後継者育成や地域
 活性化と結びつく教育内容をもたない。小中学校は地域に根ざす
 のに、高校は接点をもたず、島民である生徒さえ町のイベントに
 参加・協力する形になっていない。経済面でも地域社会の面でも、
 奥尻高校は人材育成に貢献するとは思えないという不満が募って
 いた。(徳久二〇一八・一九二―一九三)

教員と島民のそれぞれに違和感や不満がある中で、町立移管を前に
 した奥尻高等学校は下記のように考えて、まなびじま奥尻プロジェク
 トを開始した。



表1 奥尻高等学校入学者内訳

	町内生	島留学生
2017年度	10人	5人
2018年度	6人	16人
2019年度	16人	15人
2020年度	10人	21人

町立奥尻高校は、高校だけを学びの場とするのではなく、島にあるあらゆる教育資源を積極活用する。「まなびじま」にある高校、これが新生高校の位置づけであり、そこで行われる特有の教育実践を「まなびじま奥尻プロジェクト」と命名した。プロジェクトの作成にあたり俵谷が重視したのは、地域に開かれ住民も参加する事業を置くことであった。(徳久 二〇一八…一九四)

引用文献中の俵谷とは、町立移管の段階で教頭として赴任しその後町立奥尻高等学校の初代校長となった俵谷俊彦氏のことである。

「イングリッシュサロン」という英会話教室がまなびじま奥尻プロジェクトの具体例になるが、住民に近づくために高等学校の校舎内ではなく島の三つの地区で開催され、教材には観光に関するトピックが使われている。高校生も参加するが中学生や大人も一緒に参加が可能で島の誰でもが参加できるし、参加がしやすい工夫がしてある教室である。

4 島外生（島留学生）の受入れ

今日の地方郡部の高等学校の教育改革を特色づけているのは、地域の特色を生かした教育（地域のニーズを反映した教育）、生徒が魅力を感じる教育、募集対策である。

奥尻高等学校は町営化に際して、募集対策として全国募集を開始した。表1にあるように、最初の島留学生が入学した二〇一七年度の入学生は一五名で

奥尻町内の入学生が一〇名に対して第一期の島留学生は五名であった。二〇一八年度の入学生は二二名で、奥尻町内の入学生が六名に対して第二期の島留学生は一六名であった。調査訪問した二〇一九年度の入学生は三一名で奥尻町内の入学生が一六名に対して第三期の島留学生は一五名であった。二〇二〇年度は入学生は三一名で、奥尻町内が一〇名に対して第四期の島留学生は二二名であった。募集対策としての全国募集は効果を見せている。なお、全国で見ると、県外生募集を行う高等学校は、二〇二〇年度で三四一校であった（文部科学省「公立高等学校入学者選抜における県外からの募集実施状況（令和二年度）」）。

このように全国的な広がりを見せる島留学生募集（町外生募集）であるが、奥尻高等学校の全国募集は生徒数確保だけが目的ではなかった。進路指導を担当する松原教諭は卒業生が高卒後に島外に出ていきなり多様な人と触れあうと島外の生活に不適應になりがちである。高校時代に島外の生徒と触れあうことが、高卒後の島外での生活への適応をスムーズにすると述べている（『地域人材育成研究』第3号）。奥尻町は小さなコミュニティであり、町民はどの子かどこの家の子かをすべて知っているという。また、町民は冗談めかして老人同士はお互いに幼稚園以来の恋愛歴を知っている、と言っている。われわれが行った他県での訪問調査でも、県外生募集で中学時代までの固定的な人間関係からの脱却の効果が期待されることが分かっている（樋田・樋田 二〇一八、樋田有一郎 二〇二〇a）。さらに、人間関係の効果だけでなく、県外生から新しい知識や視点の獲得も行われる。

人間関係の変化が少ない奥尻島では、島外から生徒が入ること



で島に活気もたらされている。ある島内生は、「新しい考え方や当たり前だと思っていた島の自然の美しさに気付いた」、「島外生が元々住んでいた地域のお祭りや学園祭のやり方を教えてくれて、学校行事が大きく変わった」と語っている。地方創生・島の振興に向けた課題の発見や解決にも、新しい考え方やヒントをもたらす点が期待されている。（高嶋ほか二〇一九：一九）

5 公立高等学校の移管と内発的改革

筆者は、公立高等学校の移管を広い意味でとらえて設置と運営の観点から、運営面地域連携、分校化（キャンパス校化）、設置者移管の三つのタイプに分けている。これは小入羽・本多（二〇一八：八五）の議論に依拠したタイプ分けであり、筆者がタイプ名を新たに名付けて議論を行っている。

一つめは県教育委員会が設置管理する県立高校のまま、高校と県と立地自治体とが連携を模索するようなタイプである。「運営面地域連携」に該当する。島根県の高校魅力化は「運営面地域連携」に当たり、設置者が島根県のままで県による人的、財政的な支援や研修などの支援が行われ、町も人的、財政的な支援を行っている。

二つめは同じく県立高校のまま単独校ではなく分校又はキャンパス校として存続をはかるタイプである。「分校化」に該当する。二つめのタイプは『地域人材育成研究』第2号が取り上げた愛媛県立今治北高等学校大三島分校がこのタイプに当たる。統廃合への過渡的な措置として行われることが多い。

三つめは設置者を変更して存続するタイプである。このタイプには

立地自治体である市町村等が設置者となるケースと学校法人が設置者となるケースがありうる。奥尻高等学校は三つめのタイプのうちの市町村等が設置者となるケースに当たる。

奥尻高等学校のケースは廃校化を避けるためにそして町が高等学校存続の主導権を持つために（小人羽・本多 二〇一八）、あるいは廃校のうわさがある高校へは進学しにくいという状況を変えるために（『地域人材育成研究』第3号、第4号）、町立移管を町の方針とした。

町立移管は奥尻町の一方的な希望で行われたのではなく、道も必要と判断していた。奥尻高等学校は移管前の試算で年間約二〇〇〇万円町の負担増が予想されたが、そのような試算があったにもかかわらず、町が移管に踏み切った背景の一つは北海道教育委員会からの支援が受けられたことがあげられる。支援の内容は前述の通りであるが、「北海道教育委員会による支援が実施された理由は、道が当面存続を必要と判断している道立高校を市町村に移管したために……北海道が支援の必要性を認識していた」（小人羽・本多 二〇一八・八七）からである。

つぎに、山岸（二〇一六）の内発的改革の議論から奥尻高等学校の取り組みを見てみよう。山岸は、公立高等学校の改革を内発的改革の視点から四つのタイプに整理している。

地場産業との連携（長野県蘇南高等学校）、高校留学制度（福島県只見高等学校）、中高一貫制（秋田県矢島高等学校）、教育課程の改善（島根県矢上高等学校）の四つであり、それぞれカッコ内に示した高等学校を事例としてあげている。

奥尻高等学校について特筆すべきは、山岸の整理した四つの内発的

改革のすべてを行っている。奥尻高等学校の内発的改革の特徴は地域とのつながりの中で内発的に行われていることが特徴である。外から与えられた改革やいわゆる教科書通りの改革ではなく、『地域人材育成』第三号の特集②「町立に移管した奥尻高等学校が取り組んだこと（一）経緯、教員集団の変容と教師の成長」にあるように、島の課題はギリギリのことなので、それをみんまで何とかしたいということであり、校長や先輩教員からもまず自分でやってみなさいということであり、教員が育っている。周りも巻き込みながらやっていかなければ駄目なので、それが奥尻高等学校の教員集団の組織がうまくいっている背景である、との語りがあった。

具体的に見ると、まず地場産業との連携では本号（『地域人材育成研究』第4号）の各インタビューで語られたように、総合的な学習（二〇一九年度からは「総合的な探究」）の時間の一環で地元の潜水漁業と連携してスキューバダイビングのライセンスを取得させたり、奥尻パブリシティや「町おこしワークショップ」で地場産業と連携している。

高校留学制度については前述の通り二〇一七年度から全国募集（島留学）を行っている。地域・教育魅力化プラットフォーム主催の地域未来留学フェスタへの参加、町営寮の建設、帰省の際の旅費の補助などの努力をしている。

中高一貫制についてはそもそも奥尻高等学校と奥尻中学校は物理的に同じ敷地内で渡り廊下でつながっている。特別教室の利用やメンタリングシステム（高校生による中学生への指導）の導入のほか、教員間の交流もある。

最後に教育課程の改善では、総合的な学習（探究）の時間の枠で、

特色のある授業として上述の「スクーバダイビング」(※奥尻高等学校の授業名はこの表記になる)と「奥尻パブリシティ」を行っている。後者は地域課題の解決を図り広報を通して地域の発展を担おうという活動である。さらに、「町おこしワークショップ」が行われている。当初は昼休みの一五分を利用して島内の様々なエキスパートを招き講話と意見交換するというスタイルであったが、二〇一九年度は総合的な探究の時間の枠内で水曜日の七時限目に行われ、地域課題解決を目指す授業となっている。最後に、授業ではなくて部活動であるが、オクシリイノベーション事業部(OID)を立ち上げてクラウドファンディングや地元製品の開発や販売を行っている。

冒頭で述べたように、これら一連の授業や取り組みに共通しているのは、地域が必要としているから、教師がやりたいと思ったから、生徒がやりたいと思ったからということであり、奥尻高等学校における内発性は、必要だからとかやりたいからという内発であった。

6 町立高校の教育への期待

町立の奥尻高等学校に対しては、存続すること(募集対策を成功させること)、全国募集によって生徒の固定された人間関係を打破すること、地場産業の後継者育成や地域活性化と結びつく教育を行うこと(地域のニーズを反映した教育を行うこと)などが期待されていることはすでに述べたとおりである。

これに加えて、住民からは生徒が将来、奥尻島を支える人間になって欲しいという期待がある。奥尻島の島内生に対してはいつたん島を出た後にUターンして欲しいという期待であり、島外生に対しては島

を出た後にSターンをして欲しいという期待であるという。加えて、島内生に対しても島外生に対しても将来の島での定住がないとしても島の誇りになって欲しいという期待がある。町立移管当時の奥尻町地域政策課の干場洋介氏は次のように奥尻高等学校の教育内容に期待を寄せている。

さまざまな取り組みを通して、奥尻島への愛着や、誇りを持つてほしいと思っています。島から巣立ち、社会へ出て、やがて奥尻島を支え得る人間に育ってほしい。一方で、日本のみならず、世界でも活躍する人がこの中から生まれることもまた、「奥尻島の誇り」につながると考えています。奥尻高校が存続していく上で、町立学校にしてよかったと保護者や地域住民が感じることが、……奥尻高校の取り組み、現役生や卒業生の活躍を通して感じられるべきだと思っています。(干場二〇一七・八)

近年ではこれらに加えて、島内生・島外生を問わず将来の島での定住がないとしても関係人口となりさまざまに島とかかわって欲しいという期待が顕在化している(樋田大二郎二〇二〇)。

7 「頭脳循環を促進する」よそ者使用」

奥尻高等学校に限らず、徐々に、離島・中山間地域の高等学校が卒業生の地域移動に対して新しい期待をするようになった。かつての高等学校は地域内に就職先がないことを前提にして、地域外への円滑な他出や他出先での地位達成を保証することを使命としていた。その後

の過疎化の進行を前に高等学校は卒業生が地域の人材として高卒後に地域に定住することやいったん他出した後に環流して（戻ってきて）地域に定住すること（Uターン定着）を促進することを課題とするようになった。

さらに最近になり、Iターンや地域活性化の展開、高校の全国募集が広まって以降は、地方の高等学校は卒業生が他出してそのままUターンしなくとも、関係人口として地域を支えてくれることを課題としたり、よそ者がIターンすることを支援したり、人材が円滑に循環すること（Iターン後に再度他出して関係人口化すること）を支援する「よそ者使い」を育てることを課題にし始めている。Iターン者や循環人材が地域の活性化に不可避な現在、彼らを地域に呼び込み、地域で活躍させる能力を持つ優秀な「よそ者使い」を育てることが不可欠なのである。

他出時に都市部等の地元地域との相性の良さそうな人材との関係を構築して、彼や彼女らに関係人口として活用する能力を持つ「よそ者使い」や、彼や彼女らをIターン者や循環人材として呼び込み活用する能力を持つ「よそ者使い」の人材を育成することが、都市部と郡部の別を問わず今後の高校教育では重要な課題となるのではないだろうか。奥尻高等学校の全国募集とグローバルな高校教育は卓越した「よそ者使い」教育の先行事例である。

8 おわりに

地域人材育成研究会は奥尻高等学校の町立移管の目的が、生徒数を増やすだけではないし、島内生の島外での生活への適応力を高めるだ





けでもないことに注目したい。

本稿は、奥尻高校の町立移管の事例から、町が高校維持の主導権を持つことの具体的な意義、高校と地域が学びの共同体となるということの具体的な意義、公立学校の移管には分校化（キャンパス校化）・運営面地域連携・設置者移管の三つのタイプがあることおよび内発的改革の四つの側面からは奥尻高校が設置者移管（町立移管）が四つの内発的改革全ての側面をスムーズに実現させていること、町立移管によって町活性化の人材である「よそ者使い」や「関係人口」が強く期待されることを考察した。

訪問インタビューやインタビュー以外の場面での町民との会話の中で、生徒の希望を叶えてあげたいという町民の声が複数あった。奥尻町民にとって奥尻高校生はもはや遠い存在ではなくて自分たちの生徒なのである。イングリッシュサロンでは一緒に学ぶ仲間ですらある。「町おこしワークショップ」の発表会では、住民は自分がかかわったグループの発表を自慢するということがあった。生徒が島に愛着や誇りを持つだけでなく、奥尻島では町民の側も奥尻高等学校に愛着と関心と誇りを持っている。

奥尻高等学校の事例からは教育の住民主権（や社会的子育て）について考えさせられた。高校魅力化では、地域コンソーシアムやコーディネート、地域連携支援員などの制度の構築を通して、住民が具体的な授業内容にまで踏み込んでいる。そして、高校魅力化と地域の魅力化は連動されている。奥尻高等学校の事例を見ると、教師はもちろんのこと町民側から、奥尻高等学校に対して愛着と関心と誇りを持ちたいという気持ちや生徒の成長の役に立ちたいという気持ちが芽生えていた。地域人材育成研究会の調査結果は、町や住民にとって、地

元の高等学校や高校生は愛着と誇りと希望の対象であり、魅力化の高校は長いこと我慢してきた地域住民の高校に対する愛着と誇りと希望の気持ちを解放した可能性を示唆している。住民にとつての町立移管は町内に在って町内から遠い存在だった高等学校運営の主導権を獲得し(学習の地域主権)、住民が地域の子どもへの思いを表出し高校生段階での社会的子育てを実現する有効な方法になっているのではないか。

〈引用・参考文献〉

- 樋田大二郎、二〇二〇、「町立移管が示した高校教育の地域主義的転回——奥尻高校の実践から見える高校魅力化の意義」『地域人材育成研究』(3)：一〇二—一〇八。
- 樋田大二郎・樋田有一郎、二〇一八、「人口減少社会と高校魅力化プロジェクト——地域人材育成の教育社会学」明石書店。
- 樋田大二郎・樋田有一郎、二〇二二、「地域学校協働にとりくむ高校魅力化改革——地域学校協働での高校生の学びと役割」『教育研究』(六五)：一一五—一三二。
- 樋田有一郎、二〇二〇 a、「高校魅力化における『地域の特色を生かした教育』のあり方を考える——学習目標と学習効果の整合性に着目して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』(二七—二八)：五一—六三。
- 樋田有一郎、二〇二〇 b、「地域移動が形成する家業継承者の二重の主体性——島根県中山間地域の地域内よそ者のライフストーリー分析を通して」『村落社会研究ジャーナル』日本村落研究学会、(五二)：一一—二二。
- 本多正人、二〇一九、「第三章第三節 高校存続のスキームにみる政治行政過程一・高校存続のスキーム」渡邊恵子編『地方教育行政の多様性・専門性に関する研究報告書5 地方創生と教育行政』国立教育政策研究所、一〇一—一三四。
- 干場洋介、二〇一七、「北海道奥尻高等学校町立化と離島留学で魅力的な高校に」『しま』日本離島センター、六二(三)：七八—八二。
- 藤岡秀樹、二〇一九、「小規模高等学校の改革(一)」「教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要」京都教育大学教職キャリア高度化センター、(一)：二二—二二八。

小入羽秀敬・本多正人、二〇一八、「高校存続の政策選択——地方創生下における公立高校の移管を中心に」『国立教育政策研究所紀要』(二四七)：七九—九四。

小向敏文、二〇三、「地域における生涯学習の推進——学校教育と地域の連携の在り方」『生涯学習研究と実践』北海道浅井学園大学生涯学習研究所、(四)：五一—六三。

文部科学省、「公立高等学校入学者選抜における県外からの募集実施状況(令和二年度)」。

内閣府、二〇一九、「まち・ひと・しごと創生基本方針二〇一九(令和元年六月二日閣議決定)」。

篠原岳司・高嶋真之・大沼春子、二〇一九、「都道府県立高等学校の学校設置者移管に関する研究——北海道奥尻高等学校を事例に」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』(二三五)：七七—一一。

高嶋真之・大沼春子・尹景慧・淡路佳奈実・川村睦月・杉谷真実・田宮弘貴・松尾奈緒・篠原岳司、二〇一九、「北海道奥尻高等学校の町立化に伴う変化——教職員・生徒・地域住民へのインタビュー調査より」『公教育システム研究』(一八)：一一—二七。

徳久恭子、二〇一八、「高校を核とする地方創生の試み——奥尻高等学校の実践をめぐりに」『立命館法学』(三八〇)：一一九—一二〇。

山本知佳、二〇一八、「五戸高存続、町が断念4年後、閉校へ県立高校再編」『朝日新聞(青森全県)』(二〇一八年三月二三日朝刊二九面)、(五戸高存続を断念、22年3月に閉校へ)朝日新聞デジタル、<https://digital.asahi.com/articles/ASL3Q3FCDJ3QUBN008.html>。

屋敷和佳、二〇一九、「第三章二節 都道府県における高校再編整備」渡邊恵子編『地方教育行政の多様性・専門性に関する研究 報告書5 地方創生と教育行政』国立教育政策研究所、七九—一〇〇。

報告⑥

(特集)各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(下)

町立への移管の実際と住民の奥尻高校への想い (奥尻町教育委員会)

青山学院大学 樋田 大二郎

お話をうかがった桜花幸久奥尻町教育委員会事務局長によると、奥尻高校の町立移管は、町が統廃合の主導権を持ちたいという理由および中学卒業生が島外に出る状況を改善したいという理由で町長が町立移管の方針を打ち出し、北海道からも支援を得られて町立移管が実現した。保護者に年間およそ一五〇万円もの島外での高校生活の家計負担をかせがないようにすることも理由であった。

町立移管の費用は、北海道からの支援があり建物(学校、校舎、土地)、教職員住宅、物品類が無償譲渡された。人的支援では、最初の三年は教員二人、職員一人、その後の二年は教員一人を道から単独で加配される。さらに施設等の支援という趣旨で道から二一〇〇万円を補助された。人件費については、高校の人件費は交付税措置があり、教職員人件費は一億一千万円くらいで、だいたい九〇〇〇万円ぐらいの

交付税が入る。全国募集に伴う松風寮(寄宿舎)建設が当初予算で一億四二〇〇万円であった。二〇一七年度の決算だと、寮の事業を除くと維持費の支出を含めてだいたい三五〇〇万円を一般財源で補っている。桜花氏によると、北海道南西沖地震での財政出動があった町なので、「やっぱり財政負担というのは大きい」という。

教員の身分保障等については北海道道教育委員会が割愛人事を認めた。また、町の負担を条件に道の研修を利用できることとした。

桜花氏によると、割愛人事で先生の人事は全道一区で行うが、奥尻高校の状況を配慮してくれているのでありがたいということであった。

奥尻町は魅力が無いと高校生が進学しないと考えており、高校が隠

岐阜前高校の魅力化プロジェクトなどを参考に高校中心で魅力的になることを考えていることをうれしく思っているという。取り組みが若い先生達のスキルアップにつながるのであればうれしいが、過度の負担については今後の支援体制を考えたいと語られた。

奥尻町の地域性についてたずねたところ、もともと子どもたちのためなら何かしてあげたいという大人が多い地域だという。そのような地域性の由来を尋ねたところ、「子どもをかわいくない大人はあまりいないような気がします」と高校生を支援する地域性を当然視する回答であった。調査者が、重ねて由来を尋ねたところ、「子どもたちに感謝されたら、うれしい気持ちになる」、「小さな町だから多くの方が知り合い」、「信頼関係は日々の積み重ね」との回答であった。そして、町民は奥尻高校生を町の子だと意識しているということであった。続けて、①もともと中学校までは市町村立の学校で、高校になると市町村立高校じゃないから知りませんよって話ではないと思う、②子どもたちは町の子どもたちです、③今来てる島留学生だつて出身は違うが奥尻高校の生徒であり、一人の町民であるのに変わりはない、との説明が得られた。

桜花事務局長は、奥尻高校の将来の一番の課題は市町村立高校の施設整備だと考えている。生徒への様々な補助を行うことについては、補助で全国募集の生徒を取り合うのではなく、教育内容の魅力ある取り組みを充実させることが大切であり、充実については管理職の先生が若い先生を育てて教育内容の充実を図っていると考えている。

基本は、今までもそうですけども、高校は独自でいろいろやっているの、うちがそんなに入ったりすると、スピード感もなくなったりします。何かあったら責任を取るのは市町村立高校の設置者である教育委員会になります。…基本的には高校の自由な発想などを尊重し、それやっちゃ駄目、あれやっちゃ駄目とかというのは、今までもあまり言っていない。一定のルールはあるので、ここは相談しなきゃならないというのがあったり、調整事項は教育委員会が入った方がスムーズにいったりするようところがあればやっています。(インタビューより)

町や住民は島内中学卒業生だけでなく、島留学生を自分の子どものように感じている。そして、奥尻高校生の提案や発想を町の活性化の刺激として受け入れていると語られた。

1 町立への移管…生徒減による廃校の危機と 廃校の影響について

——奥尻高校の場合は、道立から町立へ移管して、そのことがきっかけで大きく変わられたように聞いております。まず、町への移管の前後のことを教えていただければと思います。

桜花幸久事務局長…奥尻高校は、平成二八年四月に北海道立高校から奥尻町立高校になりました。それ以前より町立移管の準備は、何年もかけてやっていました。

なぜ町立移管したかという点、北海道の公立高校適正配置計画の中で、一問口校（筆者注 一学年一学級定員の学校のこと）でも、第一学年の生徒数が少なかったら、統廃合の対象になります。一問口四〇人のところ、通常であれば五〇パーセントを下回る場合ですが、僻地校や離島の場合は、一〇人を下回るような状況であれば、統廃合を検討しますという状況でした。

道立高校のままであれば、いつ統廃合のテーブルに上がるかわからない状況の中で、生徒数がどんどん減ってきている状況があつて、このままではいつたらいずれ統廃合になる可能性が高かつたため、市町村立高校にして、学校存続の判断を町が決定できるよう決断しました。町長がそういう方針を打ち出したので、町立移管に向け準備しました。北海道も多くの支援をしてくれたので、二八年四月に町立移管が実現しました。

平成二七年度までは、町内中学三年生の生徒数の推移を見ると奥尻高校への入学生が一〇人を下回るといふ状況はなかったが、ただ義務教育じゃないので全員が全員、奥尻高校に進学するという状況ではないので、仮に中学三年生の卒業生が二〇人いても、一〇人以上が島の外の高校に進学することがあります。そこは本人だったり保護者だったりを選べる部分なので、常にそういった不安を持ちながらの奥尻高校だったと思います。

町立移管は、仮に入学者が一〇人を下回っても、そこは道教委から統廃合というようなことにはならないというのが、一番（の理由）です。仮に統廃合をして、奥尻高校がなくなりましたという状況を想定す



ると、現在一〇〇パーセントに近い割合で高校に進学すると思うので島に高校がないとなれば、一五歳から一八歳ぐらいまでの子どもが、進学のため全員島から出ます。そうすると、町として〇歳から一〇〇歳ぐらいまで年齢層がある中で、一番元気な一六歳から一八歳の世代が空白の世代になります。まちづくりの面で考えると、将来的にそういう子どもたちが、奥尻に戻ってきて島で働いたり暮らしたりする状況にはならないんじゃないのかなという考えがあります。高校が島にあることは、まちづくりの面でも不可欠であると考えます。あと仮に島の外に子どもを下宿とかさせた場合、年間に一五〇万円前後の負担が保護者には発生すると考えられます。

——年間で一五〇万円ぐらい。

桜花事務局長…はい。個人差だったり状況の違いはあるとは思いますが。しかし、そうなると家計への負担が大きく、それを機に一家転住してしまうことが想定されます。ますます過疎化、高齢化が進んでしまうので、高校があるだけで一家転住のような事態がなくなるのであれば、高校が存続する意義は大きいと考えます。

あと若い世代にしてみても、小学生以下の保護者にしてみても、自分の子どもが、数年後、高校入学となったとき、高校があるかないかわからない状況で、子育てするというのは、将来の不安を抱えたまま暮らすことになります。そういう若年層世代のためにも町立移管して、高校が存続することを示すことで、高校までは少なくとも地元で安心して暮らせる環境があると示すことも大事なのかなと考えています。

——そうですね。一家転住のおそれがあったら、そうなるとよく聞くのはおじいちゃん、おばあちゃんだけ残して、弟、妹も連れていなくなってしまうということが考えられます。隠岐島前高校がある島根県の島前地域の場合は、そのような結果人口が減って、船が毎日来なくなってしまうという、そういう将来予測を話されていたように思います。

あとこの島は、一ターナー者とか二ターナー者は多い島ですか？

桜花事務局長…あんまりいいですね。隠岐島前から見たら全然少ないと思います。

——隠岐島前高校の高校魅力化では高校が無くなると一家転住が起きることと一ターナー者が来なくなるということを高校魅力化を訴えるポイントにされていたように思います。

桜花事務局長…過疎化、高齢化というと、どんどん子どもたちが減ってきている状況です。かつ、ここは航空自衛隊基地の縮小も囁かれ、ますます人が少なくなる状況という中で、外から人を呼ばないと町立に移管してもじり貧になるという背景もありました。平成二八年に町立移管しましたが生徒数は大変な状況でした。平成二九年度から全国募集して外から生徒を呼びましょうということになりました。

2 町立に移管する費用

——奥尻高校は、全国募集も含めて平成二八年、平成二九年、平成三〇年とフットワークが軽い感じでどんどん改革が進んだというふう

うに見えていますか、これは何がそれを可能にさせたのでしょうか？

桜花事務局長…町長や教育長のリーダーシップに依るところが大きく、道教委の支援もあり実現できたと考えます。

——町立に移管するということがどういうことを教えて下さい。まず、町立に移管するということは、これは学校の予算のどの部分が、町の負担になるのでしょうか？

桜花事務局長…基本、全てです。

——そうなんですか。

桜花事務局長…はい。先生たちの給料も、大半は交付税措置されますが県費負担じゃなくなります。

——建物はそのまま町に？

桜花事務局長…町立移管で道がやってくれた支援策というと、主に三つあります。一つは、今言った建物の無償譲渡です。学校、校舎、土地も含めた学校校舎だったり、教職員住宅、それに中の物品類ですね。全て無償で譲渡してくれました。教員住宅の一部は、当時償還中の建物もありました。それらは町立移管後、すぐ無償譲渡というふうにはならなかったんですけども、道のほうでも繰り上げ償還する予算を追加で措置し、全額繰り上げ償還して、道の財産にしてから奥尻町に譲

渡してくれました。

その次は人的支援で北海道が単独で職員を加配し、最初の三年は三人で、その内訳は教員二人と事務一人の三人となっています。その後の二年は、教員一人を道が単独で加配しています。今年から教員一人だけ道の加配支援を受けています。この五年間のうち、道が単独で加配するので、その間に町立高校としての学校運営地盤を築いてくださいという狙いからの支援策となります。

あともう一つが、金銭的支援になります。施設等の維持管理費も嵩むため、二〇〇万円を補助してくれました。現在は基金として運用し、残高は今年度末で五〇〇万円弱となる見込みです。高校の施設整備の維持などに必要な経費です。中学校を敷地内に統合して新設し、中高連携の部分においても、経費に充ててほしいとの説明を受けています。大きくこの三つです。

——町の高校への支出って、年間どのぐらいの金額になりますでしょうか？

桜花事務局長…今年でいうと、一番は人件費になります。だいたい一億円ぐらいですが、教職員一人当たり六〇〇万円程度が交付税措置されています。高校の教員配置基準に基づく人数で措置されます。

——はい。

桜花事務局長…その人数の分は、交付税措置されます。ですから、だいたい九〇〇〇万円ぐらいは、交付税で入って来ます。教職員人件



費の支出は一億円ちょっと、一億一〇〇〇万円弱ぐらいです。ということで、人件費の支出は町立移管で二〇〇〇万円くらい増えていることとなります。あと去年と今年は寄宿舎を整備しています。

——寄宿舎の費用が高いんですね。

桜花事務局長…寄宿舎整備事業の予算が当初予算で一億四二〇〇万円となつていきます。寄宿舎事業が動いてなかったら、二九年度の決算だと、歳出で一億四〇〇〇万円強ですね。歳入が、一億一〇〇〇万円弱なので、だいたい三五〇〇万円ぐらい一般財源で補っています。

——なるほど。そうしますと、町立への移管の中では、全国募集が当面の大きな出費になつたということでしょうか。

桜花事務局長…結果的にそうですね。ただ、この全国募集も二九年度から始めていますが、例えば全国募集しないで町立高校のままであれば、もともと学区外就学という制度はあったので、道内であればこの地域からでも奥尻高校に入学できました。

全国募集を開始するとき、受け入れ態勢が整つてなくて、全国募集と同時に、全部の旅館とか民宿をあたつて、収入になるのでやりませんかといって声掛けをして、手を挙げてくれたところが何軒もあり、全部で二〇部屋を超えたため実現しました。学区外就学は定員の五〇パーセントまで受け入れられます。三年目を迎えたとき、旅館、民宿で協力できるところが限界を迎えたため、寄宿舎の建設をしようと判断しました。これが、去年新築し、今年また増築している寄宿舎の状



況です。

——昨日見てきました。

桜花事務局長…例えば生徒数が少なかったら増築事業は二年後三年後だったかもしれません。結果的に今年も一五名が入学したため増築事業に取りかかることになりました。

例えば町立移管だけで全国募集していなかったら、地元の子しかない状況のまま推移して一学年一〇人程度の生徒数となると、仮に一五人としたら三学年で四五人ぐらいいしかいない。幼稚園の頃から中学校までおなじ仲間です。学年進行していく中で、それが嫌でどこかの高校に出たいという子どもも出てきます。

他にも部活動によって人数制限が生じ、合同チームを作り野球大会などに出場したりしますけども、ある程度の人数がいないと活発な活動ができません。

学習環境は整っていても、人としての成長をするための人間関係をつくるためにも、島の外から生徒がたくさん来てくれれば、人との関わりの中でいろんな刺激にもなり、それを見ている中学生や小学生も、奥尻高校に行ってみたいというふうに自然と足が向けば、お金で測れないような効果が期待されます。

——町立への移管に関わって、どのような苦労があったのでしょうか？

桜花事務局長…色々な苦労は、当然あったと思います。町立高校への移管は、誰に聞いてもわからないし、そういう前例もないので、道の

担当者だったり、いろんな部署に相談したり、そういう人たちの支援や協力があって実現したと考えています。

あとマスコミの人たちも宣伝してくれたり、情報発信力という部分ではそういう力も結構ありがたかったと思います。

3 町としての町立高校の教育ビジョン

——町への移管が進行していつて、その後、教育内容も大きく変わっていったと思います。俵谷校長先生、それから今の清水校長先生も町立高校ということについてかなり考えてくださっている感じがしました。町としては高校教育のビジョンとして、町立高校となった奥尻高校はこういう方向で行きたいというようなことをあらかじめ計画していたのがあったのか、それとも、計画は走りながらできてきたのか、その辺りからお伺いしたいと思います。

桜花事務局長…基本的には普通科の高校なので、まずそのベースは変えられないと考えています。魅力ある学校づくりというのがないとなかなか生徒を呼べないと思います。隠岐島前高校の魅力化プロジェクトなども参考に高校が中心となって考えています。

奥尻高校はスキューバダイビングを平成七年から取り組んでいます。スキューバダイビングをやっている高校は少ないので、それに魅力を感じて、奥尻高校に足を向ける子どもたちは多いと考えています。それだけじゃなく、まなびじま奥尻プロジェクトを推進しており魅力を感ずる取り組みの一つになっていると考えています。

学校が中心となり、そういった取り組み活動をしてもらっているこ

とは、町としてはすぐくありがたいです。大半の若い先生たちも、いろんなことを若いうちに経験することで、自身のスキルアップにつながってもらえれば、うれしいと思います。ただ、働き方改革の中で、一定以上の労働はさせられない部分に対する今後の支援体制も検討して行きたいと考えます。

——次に、日々の奥尻高校の教育への支援について、お伺いしたいのですが、奥尻高校は町への移管のあと、まちづくりワークショップを始められたと聞いています。その辺のことに対して、町の人はどんな感じに対応されましたでしょうか？あるいは、教育委員会としては、どんな感じに対応されましたでしょうか？

桜花事務局長…高校が発信したアイデアの一つで、もともと町民自体が子どもたちのためだったら力になりたいという人も多く、まちづくりワークショップで例えば漁業だったり、観光業だったり、建設業だったり、色々な職業のリーダーみたいな人を講師として迎えて、いろんな話を聞き今後に活かすというのが、ワークショップだと考えています。そういう話を聞いて、子どもたちも将来のことを考えたり取り組んだりということは、ほかの町じゃ実践していないような取り組みもある。自分たちの町を知るということは、ふるさと教育の一環にもなり、子どもたちの成長につながる取り組みであるが、町民にとって一層子どもたちのほうに目を向けることになり、町民も奥尻高校が町立高校になって、前とは違うなみたいな意識は生まれたと感じています。

——これは、桜花さんの感覚というか感想で結構ですが、住民の方がまちづくりというか、奥尻高校のことに対して能動的というか積極的な感じを受けたのですけれども、それはこの島全体の雰囲気としてそういうのでしょうか？

桜花事務局長…それはあると思います。小中学校にすでにコミュニケーションスクールを導入していますが、ほかの町よりはスムーズに導入できたことはもともとそういう地盤ができていたという部分があるからであり、高校にはまだコミュニケーションスクールを導入していませんが、内容的には地域の力をたくさん借りながら、いろんなことをやっているのコミュニケーションスクールの要素は高いと考えています。

もともと地域性なのか、子どもたちのためなら何かしてあげたいという大人が多いこともプラスに働いています。

——そうした、子どもたちのためなら何かしてあげたいという気持ちは、どこから生まれてきたのでしょうか？

桜花事務局長…子どもをかわいくない大人はあまりいないような気がします。

——奥尻の皆さんはかなり町の活性化、そして、高校の活性化に前向きだなという感じがするんですけども。

桜花事務局長…お年寄りだって、若い頃はあったわけで、子育ての経験もあります。例えば小中学校の運動会といっても、近所のお年寄り

も来てくださいと案内している学校もあります。

先程のコミュニケーションスクールじゃありませんが、地域と共にある学校づくりを推進しているなかでは、町民も学校に協力し子どもたちに感謝されたらうれしい気持ちにもなるし、そういうことが積み重なり町自体がそういった学校だったり子どもたちだったりに対して協力的な町になってると思うんです。

小さな町だから、多くの方が知り合いみたいなどころがあるので、親戚じゃなくても近所に子どもがいて、何か困っていたら「どうした？」みたいなどころがあるし、地域同士のつながりができています。学校と地域もつながっています。災害を経験した町ですけども、地域との協力的体制ができている町であると感じています。

——私も日本のあちこち行ったり、あるいは、話を聞いたりしている中で、例えばさっきの災害の話ですが、災害時に立ち直る動きが速かった地域と、あまり早くはなかった地域がありました。今、桜花さんがおっしゃったような協力するような人間関係ができていたところが早かったわけです。しかし、じゃあ、その人間関係ってどうやってできたんでしょうねって聞くと、「さあ？」というふうになってしまってますけども。

桜花事務局長…信頼関係は日々の積み重ねと考えています。

——昨日、高校で聞いたのですが、地域に出ていって、地域の人がほんとに応援してくれる、関心を持ってくれるということを先生も生徒も感じている。それは、桜花さんも感じられますか？



桜花事務局長…そうですね。隠岐島前高校のある海士町へ自分も行ったことはあります。海士町の町内を歩いてたら、すれ違う子どもたちからあいさつされ、すごく声を掛けられるので、都会から来る人は、そういうのに驚いたりしますけど、この町もあいさつを積極的に行っていると感じています。

——住民の協力があるなって感じられた瞬間は、例えばどんなときがありましたでしょうか？

桜花事務局長…学校教育の面ですか？

——高校教育に対して。

桜花事務局長…何か困ったことがあるたびに協力しています。例えば社会科見学とかでどこかに行きますってなったときも、快く受け入れてくれる施設が多いと感じています。敬老会の方だったり、女性団体の方だったり、講師として調理協力なども、積極的に協力していただいています。

——そういうときの反応は、かなりいいですか？

桜花事務局長…いいと思います。

——これも昨日、高校で聞いたのですが、スクーバ（スキューバダイ

ピング）に関しても、町立移管したあと、新たに住民が支援するような体制が発展したと聞いています。

桜花事務局長…もともと奥尻は、北海道で一番最初に潜水器漁業という漁業が根付いたところで、潜水器漁業者の団体も幾つかあり、協力をお願いしています。中には卒業生もおり、その漁業者の中には、奥尻高校のスクーバ授業を選択し、潜水土の資格を取得した漁業者もいます。

——平成七年以前には、どうしてそういうシステムにまで発展しなかったんでしょう？

桜花事務局長…道立高校の先生は、地域の協力を仰いでまでという発想にならなかったのではと考えます。でも、道立高校時代の考え方なので、個人的な表現にはなりませんので正確にはわかりません。

ただ平成七年からスクーバを始めたきっかけは、聞いているところでは、平成五年に北海道の南西沖地震があつて、町の将来を危惧した町の理事者（町長）が、スクーバで、奥尻の海のきれいさ、素晴らしさを知ってもらうため、地震による津波で作られた海は恐ろしいというイメージを払拭したため、スクーバを導入したと伺っています。

——町長さん、町側がそういうふうな思いを最初にお持ちになつて。

桜花事務局長…はい。だから、町で予算を出すので、高校でやりませんかとかつていつて、それがきっかけであると聞いてます。



——先ほどからお話の中で繰り返し印象を持ったのですが、町長さんが、町立にしたいと思われたり、今のスクーバに関しても、町の側から提案されたり、町、あるいは住民としては、高校のことをチャンスがあればサポートしたいという気持ちは、ずっとあったということなのでしょうが？

桜花事務局長…そうですね。中学校までは市町村立の学校で、高校になると市町村立高校じゃないから、知りませんよという話ではないと思うんです。子どもたちは、町の子どもたちですからね。今来てる島留学生だって、出身は違いますけども、奥尻高校の生徒であり、住所も移してるし、一人の町民であるのに変わりはないと思います。

——町の子だという意識ですか。

桜花事務局長…そうですね。理想を言うと、島留学生も三年間奥尻で暮らし、大きく成長して、ふるさとに帰ったりして奥尻の三年間、すごく人生経験の中で貴重な三年間でよかったと言ってもらえるといろんな宣伝にもなるし、そういう人たち、羽ばたいた人たちが、また奥尻に戻ってきて働いてみたりとか、移住者、定住者につながったりすると、町としてはこの町立移管や全国募集をやってよかったなというふうになると思います。いずれそういう時代は来ると思っています。まだ三年目なので、実績はないですが将来は必ず島に定着する子どもたちがでてくると思っています。

——いわゆるSターンも頭の片隅にはあるということでしょうか。

桜花事務局長…こういう取り組みをしないと、そういうのも生まれにくいからですね。やっぱり元々の住民というのは少なくなる一方なので、町の機能を維持するためには、外から人が来ないと今後は衰退する一方となります。

——昨日、高校生にインタビューしてとても興味深かったのは、対象者は島外から来た二人だったのですがこの島が好きだと言っていました。ただ、その好きだという言い方が、生まれ育った生徒さんが言うのとは違う言い方でこの島としっかりとかい合った上で好きだと言っているのがとても印象的で、SターンというのはUターンとは違うかたちで起るのかなということを感じました。

桜花事務局長…島留学生制度も不安を抱えていて、隠岐島前高校でも最初は、なかなかうまく定着しなかったけども、ある程度軌道に乗ってきたらというのは聞くので、そこは急ぐ必要はないとも考えています。

4 教育委員会のかかわり方

桜花事務局長…将来の一番の課題は、市町村立高校の施設整備。生徒への様々な補助については、全国募集の生徒を取り合うのではなく、教育内容の魅力ある取り組みを充実させることが大切。管理職の先生が若い先生を育てています。

——先ほどは移管のときの町の教育委員会の関わりをお伺いしましたが、いま現在は、町の教育委員会としてはどんな関わり方をなさってますでしょうか？

桜花事務局長…その関わり方というのは、どういった部分を指していますか。財政的な部分とですか。

——財政的な部分と、それから、町民と高校とをつなぐときの支援。

桜花事務局長…基本は、今までもそうですけども、高校は独自でいろいろやってるので、うちがそんなに入ったりすると、スピード感もなくなったりします。何かあったら責任を取るのは市町村立高校の設置者である教育委員会になります。募集事項は高校から相談があれば相談したりもします。

基本的には高校の自由な発想を尊重し、それやっちゃ駄目、あれやっちゃ駄目とかというのは、今までもあまり言っていないですね。一定のルールはあるので、ここは相談しなきゃならないというのがあったり、調整事項は教育委員会が入った方がスムーズにいったりするところがあるところがあれば、やっています。

支援の中では、島留学生のいろいろな負担軽減の部分で、条例化だったり制度設計だったりをしているので、そういうのが今後ずっと継続していくと思います。

これから地域留学しようという学校が、隠岐島前高校や奥尻高校の

例を見て、財政支援をもっと充実したものでやるとなってきたときに、例えばうちは今、下宿の補助でいったら三万円の月額補助をしています。ほかのところは、じゃあ、うちは五万円出しますとしたときにそっちへ生徒が流れるかもしれないけれども、それはそれだと思っています。

そういうのよりは、やっぱり魅力ある取り組みをどれだけやっているかということ、ぶれずに進みたい。一時的に他の高校に取られても、自分たちの取り組みに自信を持ってやっていけば、自然と結果はついてくるのかなというふうに思っています。

補助制度でいったら、他にも幾つかあります。スクールバスを無料にし、島留学生への昼食も補助したり、帰省する経費も生徒は四回、保護者は二回まで上限を設けて二分の一補助しています。これらはほかの地域でもやっていますが、現状は今後もそういう補助を継続しつつ、いずれ人数が増えすぎたりしたときに見直しも検討するものと考えます。うれしい悲鳴なのかもしれませんが、それが三年後か、五年後かわかりません。まだまだ課題もないわけではないですね。

一番の課題でいったら、市町村立高校の施設整備の部分です。この辺は、補助制度がないので、中学校を建てるとかというのと違って、いずれ大きな課題になってきます。同じ規模で高校を建てるとなったら、数十億円以上になると思います。起債はつくかもしれませんが、今後どう判断するのかというのは心配です。

——なるほど。

桜花事務局長…隠岐島前高校は、県立高校のまんまやっていますからね。逆に隠岐島前高校へ行ったときに、市町村立高校にしたらいろんな独自の取り組みがやりやすく、それもいい方法です。ねみたいな言われ方はしたことがあります。いい面はあるけど、反面、マイナスになる部分もあるため、今後も慎重に進める必要があります。

—日本のあちこちの高校を回らせていただいたり、私自身もある高校とは六年間お付き合いさせていただいて、カリキュラム開発とかもやっていますが、町に移管した後の奥尻高校さんの町との協働の在り方はフットワークが軽くて、生徒にとつての居場所、ほんとにまなびしま奥尻になっていると感じました。

生徒インタビューでは、都会では自分の住んでるマンションの隣の人は知っててもそれ以上の人は知らない。そして、学校も五クラスも六クラスもあるから、よく知らない友達がいりする。奥尻は、都会で暮らすのとは全然違う生活があって、町の人に支えられながら、いろんなチャレンジをしたり自己実現をするようになっていて、生徒さんの言葉では、中学時代までと比べて自分は成長したと言っていました。奥尻高校ではかなり充実した生活を送っているのだろうと思います。

桜花事務局長…小規模校だからできることというのは、確かにあるかもしれないですけども、先生たちがすごく頑張ってくれているというのが幸いです。

—そうですね。小規模なのともう一つ言えば、生徒も先生もほんと



に主体的、自主的に活動されていると感じます。

桜花事務局長…先生たちも、今、割愛人事でここにいるというだけで、いずれまた道立高校に戻ったりします。

—それもお伺いしたかったんですけども、前校長の俵谷先生、現校長の清水先生を始めとして、ほんとに奥尻高校のために先生になったような、そういうセンスのある人が続いていますけども、町から道に對してこういう人が欲しいというふうのリクエストできるのでしょうか？

桜花事務局長…小中学校と違い、高校の人事は、北海道一円なので、奥尻にいる人が利尻・礼文とかに行ったりもするし、全道一区なので、基本的に選んだりできません。

校長先生のリーダーシップは大事ですし、まだ町立になって清水校長で二人目ですが、いずれお二人とは違うタイプの先生が来るのかもしれないですけども、道教委の人事担当の方も、市町村立高校に派遣する校長先生については、教育長にも相談があったり、それなりの人材を優先して斡旋してくれるので、ありがたく思っています。

もともと離島の学校は、高校だけじゃなく小中学校も初任者が多かったです。そんな中、初任者の先生もみんな頑張ってくれます。前任の俵谷校長が言っていたのは、やる気のないベテランの先生よりは、やる気のある若い先生がたくさんいたほうが、戦う集団じゃないんでしようけど、そのほうが全然いいよと言っていたので、その辺は管理職がうまく人を育てているのかなと思います。



清水信彦校長

——奥尻高校訪問中に、リーダー的な先生と一緒に授業を見て回りました。授業はワークシヨップ的なものだったのですが、その先生はポイント、ポイントをかなりの確に押さえておられて、その場で若い先生と話をし、若い先生が気付くように、教え込むのではなくて気付くように上手に話をされています。あの先生がいれば、大丈夫だろうというふうな人を俵谷先生は育てていかれたのかなと思います。

桜花事務局長…子どもたちも育っているかもしれないけど、先生たちも育っているという面ではうまく回っているのかな。そういうときは、私たちは静観して、頑張ってくださいで、何か困ったときだけ前に出るみたいな感じで全然いいのかなと思います。

——奥尻町教育委員会としては、町に移管して今のところ成功しているというふうに、そんな見方をしていますか。

桜花事務局長…対外的にはそういうふうに伝わっていますけども、やっぱり財政負担というのは大きく、来年以降、役場庁舎の建設事業も進むので今後の学校運営を危惧しています。北海道南西沖地震で、いろんな財政出動が嵩み、給与を削減したり、貯蓄的な基金なども全然なく。以前は庁舎建設基金などもありましたが、取り崩し、一般財源に回す時代もありました。(町立移管の財政面では)もうちょっと年数がたつたときに、島留学生が奥尻に就職したりし、ほんとの人口増につながったりすることが一番の説得材料になってくると思っています。町立移管して交付税でこれだけ入ってくるよと言っても分かりにくいと思う

んですよね。地元の子どもに補助しないのかという意見もよく聞きますが、外から来る子は、それなりの負担、覚悟を持っているので、支援しなきゃならないと思います。

5 インタビュー後のフリートーク

——魅力化の高校は、多くの場合が教師も生徒も地域に出ていきます。地域の人の協力がなければ、成り立たないような高校教育になっていくと思うんですけども、私どもが見てきた範囲では、その過程で地域の人もとても成長されるというか、強くたくましくなられていくという側面があると思うんです。とりわけ高校生が来ると、よっしゃ、助けてやろうみたいなかたちで、町のもともとのリーダーじゃない人たちも、それまで元気がなかった町民も、高校生が来ると、よっしゃ、手伝ってやろう、支えてやろうというかたちでたくましくなっていくというところをたくさん見えています。奥尻島でもそういうようなことは起きていますでしょうか？

桜花事務局長…島おやの話とかがって聞かれましたか？

——少し聞いてます。

桜花事務局長…そういう人たちがまさにそうだったり、さっき言った町おこしワークシヨップに協力する方々。それにエントリーしてない人たちでも、たまたま自分がその状況になったら、可能な範囲で協力はすると思います。

——具体的に何か例があったら、教えていただけるとわかりやすいと思うんですけど。

桜花事務局長：ほんとに「島おや」とか「島おじ」、「島おば」の制度で、家族みたいなつながり、付き合いをしている方もいるし、島おやとなつて、島留學生が自宅に泊まつたりとかもすることもあるんです。里帰りしたらお土産買ってきてくれることもあり、島おやになって良かったとの声も聞きます。

先日もキャリア教育の一環で、いろんな事業所に子どもたちが行きました。教育委員会でも生徒を受け入れていますが、受け入れ先の事業所もたぶん増えていると思います。受け入れ先の調整は学校の担当の先生たちが中心となって実施していますが、先生たちは、結局は長くても五年ぐらいで異動してしまいます。先生方は、何年か暮らせば地域とのつながりもできますが、新しい先生達は頼んだりとかということも、引き継ぎとかではあるかもしれないけども、難しい場合がある。そういうときのサポートは、教育委員会が行つたりしており、教育委員会がサポートすることで、ネットワークは軽いと思います。

——実は、国レベルでは財政諮問会議とか、まち・ひと・しごと創生の会議の閣議決定で、高校がきっかけとなり町を元気にするという方針を出しているんですけども、そういうところは、奥尻では起きてますでしょうか？

桜花事務局長：高校生が町の課題をいろいろ考えて、町長へ政策提案

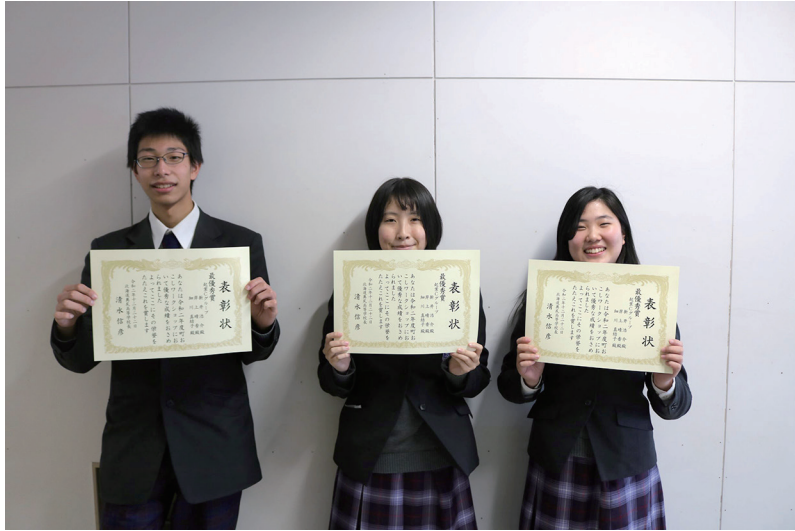
するという取組みを実施しています。これも日が浅い取組みでありませんが、高校生の発想をヒントに町の担当者もいろんなこと、考え、町の職員にとつても、そういう刺激にはプラスに働くと考えます。

高校生の発想が刺激になって、町とか町職員も今までできなかったことが、できるようになれば、直接的に高校が核となって動いて、何かをやりましたという成果が生まれます。いろんな効果は期待できるのかなと思います。いずれはそういう時代が来ると思います。

——いずれじゃなくて、近い将来そんなことが起きるだろうと思います。ほかの県の事例でいうと、高校生がその町にある、忘れられていた資源や在来植物、食べ物であったり、観光資源であったり、それから文化資源であったりとかに着目してそれをどうにかしようとしている姿を見て、そういえば自分の周りにもあれがあったなとか、そういえば言われてみればこれを使うこともできたなというようなことで、町の人が町おこしに取り組むというようなことが、まだぼつぼつですけども起きてきているので、この島でもたぶん起きるだろうと思います。

桜花事務局長：自然が残ってる部分では、都会にはないようなものもたくさんこの島には残っているので。奥尻にもともと住んでる自分らは気付かない部分も、都会から来る子だったら気付いて、これって当たり前かもしれないけど、素晴らしいことだよというのを逆に気付かされ、それが観光資源につながったりする場合が考えられます。

——そういうことが増えてくるだろうと思います。高校をなくさなく



てよかったなというふうに、全国の離島・中山間地域が、だんだんそう思ってきていますので、これもそうなると思います。時々奥尻を訪問させていただき、そつなる過程を確かめたいと思います。

桜花事務局長…自分らも町立移管で北海道はすごくいろんな支援をしてくれ、その一番の恩返しは、町立高校に移管して、すごくよくなつたねとか、生徒の全国募集もどんどん増えてきたりとかつていう実績を積むことが、北海道への恩返しにもなるしというふうに思っています。もちろん、北海道だけじゃなく、応援してくれるいろんな大学の先生や、ほかにもたくさんおりますが、企業も含めて支援してくれるところには、そういう面で恩返ししていければなと思います。

— 高校魅力化の地元では、かなり強力なチームが、町の中で大きく広がっているというのを感じることがあります。

桜花事務局長…町長も「チーム奥尻」というキャッチフレーズで、町一丸で島を盛り上げるために何ができるかと普段より言っています。町民も含め、町職員が一丸となって今後もまちづくりを進めるため、高校を核とした取組を發展させて行けたらと考えます。

— 奥尻では、自分の住んでるところをよくするために、一生懸命になつてみたい、工夫してみたい、楽しみたいみたいな感情であつて、この感情は普通の人間的な感覚から生まれていて、その普通の人間的な感覚が、長いこと表に出すことができなかつたのが高校魅力化をきっかけに出せるようになったのだと思います。

一度出るようになると、じゃあ、あれもやってみたい、これもやってみたい、これは楽しい。大人の能動的な地域愛を見ている高校生も、これは楽しそう。だから、私もやりたい。こうして相乗効果が生まれて、高校生が楽しんできると、大人も楽しもうということで、どんどんあとは増殖していると感じています。

桜花事務局長…相乗効果は、やっぱり小学校の先生たちも、高校生の取り組みを見て、「高校生はすごいな」とかって言ったりしてるので。そういうことは、小学生の子どもたちにも聞こえているので、小学生も自分が高校生になるとときには、ああいう高校生になりたいという、目指す目標みたいなのでできれば、もっともっと町自体が元気になっていくのかなと考えます。

——まなびしま奥尻の後ろにたのしみ島奥尻というのが背景にあると、すごいまなび島になるんだろうと思います。今、高校の中を見ていると、そういうのがどんどん始まるうとしてるなというふうに感じますので。

桜花事務局長…学校へ行くと楽しそうですもんね、みんなね、先生たちも含めて。自分たちも子どもたちの明るい笑顔を糧に、奥尻の未来のため、頑張って行きたいと思います。

——それでは、今日はありがとうございました。

報告⑦

(特集)各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(下)

町の課題にもとづいた高校魅力化との協働(奥尻町役場水産農林課)

青山学院大学 樋田 大二郎

奥尻町役場水産農林課の満島章課長と横田稔主幹へのインタビューでは、冒頭で奥尻島は水産業も農業も変わろうとしていることが語られた。とりわけ、高齢化が進んでいることが課題となっている。現状は若い人を引き留めるだけの魅力が発信されていないという。卒業生の水産農林の分野での雇用機会(お二人は「受け皿」という)は、ハードルが高いと認識している。例えば漁業だったら、一人親方が多いなどの課題がある。また、いわゆる新規事業を作っていくような仕組みが島の中にはまだあまりできていないという。

地域人材像については、お二人は奥尻島の産業の変化を踏まえて、地域人材像を描いている。卒業後にいったん外に出てその後戻って来ることを前提にして次のように地域人材像を語った。水産業では最先端の漁業や機械などの今までにない漁業の仕方を学んできてもらって

それを地域に浸透させる地域人材や、販売に精通している地域人材である。農業では生産したものを加工して流通させる六次産業を起業する人が必要なので、それを町全体として行えるようにする地域人材である。

水産農林課が高校との協働に至った経緯を尋ねたところ、平成五年の北海道南西沖地震の二年後の平成七年のスクーバダイビング(スキューバダイビング)の授業以来の協働であり、歴史を重ねてきたが町立移管のあとで、高校との関係が一気に深まっているという。

これ、町立の高校になったっていう意味だと思います。それで教育委員会の方が所管にはなるんですけど、今までは支援してい



うお金だけのつながり。補助金っていう形での関係から、やっぱり町立っていうことで、……自分たちの高校っていうわけじゃないんですけど、それで携わることが多くなったりとか、前から父母会もありながらなんですけど、大体OBの方々も役場にいたりとかでそういうのかな……。やっぱり町立で身近になったのかな。ここをなくすわけにいかないというのがありますけどね。(インタビューより)

高校と役場の協働の中で、お二人は奥尻高校が熱い思いを持っていること、いろんな工夫をしていること、さらに生徒も教師も取組の中で成長・変化していることを感じている。

お二人は島で育った子が、意外に島のことを知らないということも感じている。

やっぱり学校っていう大きい括りの中で、そんなに深くは携わってなかったんじゃないかなと思います。高校になるとやっぱりグッと違いますよね。それを授業として考えるということをやっていることなんです。そういう意味では違うと思います。(インタビューより)

お二人は高校と地域の協働の中で生徒の成長を感じるようになる。お二人の話で印象深かったのは、生徒が成長したと思うのはどんなところを見てどういうふうに成長したと思ったかを尋ねたときである。

(一年目は)聞いただけだったのが二年目になると自分たちから

わかんないことを当然また聞くんですけど、こうした方がいいんじゃないかっていう提案をちゃんと言ってくれる。現状をちゃんと知って、どうしてこうなったのか疑問に思ってくれるっていう……町おこしワークショップの中で僕ら考えを引き出してあげればいいと思うので、そういう形のやりとりになります。一年目はやっぱり何もわかんない中で、ただ一方的に聞いただけかもしれないですけど、二年目になったら疑問に思うことを考えられて、それをちよつと僕たちに話してくれるっていうのがすごい成長だと思えます。(インタビューより)

お二人は奥尻高校の教師との間では次のように協働の関係が築かれてつとあると認識している。また、お二人は高校生を支援したいと考えている。ひとつには、島留學生が来たことで、奥尻高校には魅力があるのだと気づかされたという。もうひとつには生徒への関心が高まったという。たとえば、高校生が自分たちでは思いつかない素晴らしいことを考えてくれることがあり、実現させてあげたいという思いになると語った。

「なんで俺たちの言ったことやってくんないの」っていうぐらいの気持ちで言ってくるので、何でもいいからとりあえずよく話し聞くと、僕らの視点では思わない素晴らしいことを考えてくれることもあるんですよ。(インタビューより)

形がドストレートに同じもんじゃないやなくてもいいので、君たちのヒントがこうなったんだよっていう物を僕らは何かやってあげた

いっていいのはいっぱいありますね。「(漁師になりたいという島留學生に対して) なりたいと思ってる子に全精力注いであげられるようにしてあげたい気持ちがあります」(インタビューより)

と語った。また、今はそれまであまり気にならなかった卒業生の進路が気になるようになったと述べた。そして、全国募集については、奥尻での高校生活が気に入って入学してやることを知ったので、奥尻高校の魅力を教えたいという。

1 奥尻町の地域活性化の状況

——この町の地域活性化の状況を水産農林課の視点から見てどのように見ておられるか。そのことからお願いいたします。

横田稔主幹：水産的な部分でいくと今、やはり組合、漁業協同組合なんですけど、漁師の人が二〇代以下っていうか二〇代を割る人が一人つという中で、もうほぼ六〇代の方々が漁業支えて頑張つて、水揚げに貢献してるっていう状況です。ただ、頑張つてるその方々があと五年、一〇年やつてつても、だんだんと漁業に携われなくなった時には、やはり今のうちから若い人方が経験を積んでいかないと島の漁業は成り立たないっていう状況だと思います。一時期は、若い方々もちよつとずつ入ってたんですけど、その方々ももう三〇代から四〇代という中堅クラスまでなつてきてるもんですから、新たに若い人方が、島の中での若い人方がどんどん増えていけばということが漁業の状況でこ

ございますね。

満島章課長…農業も同じように高齢化の状況です。奥尻の農業は離島農業なので、ほかのところとはちよつと違って小規模なんですけども、漁業より、もつと人数も少ない中で一七戸の農家さん。そんな中で漁業よりもつと高齢化してて、多分漁師の方が五〇代、六〇代。農家の方は六〇代、七〇代っていうちよつと一〇歳ぐらい年齢が高いから同じく担い手がいなくていいことで、若い人たちで五〇代。そういう人たちが今、頑張れるうちに農業の仕組みを今のうちに取り組んでいかないと。

さつき言ったように漁業を担う人が減っているのと同じで農業も減っていく状況があります。農業の活性化で言うと、担い手という部分で高校生がこれから島に残っていく。そういうことになるのかなと思っっています。

——島に残ってほしい。あるいは、島で活躍してほしいというところなんですけども、今現在農業や漁業の跡を継ぐ若手がいなくていいこととは、農業、漁業がこれまでと同じでは難しいというふうに理解してよろしいでしょうか。

横田主幹…そうですね。漁業でいうと、私も子どもどもの頃からでも、親が漁師であっても、自分が苦労したぶん、子どもには漁師やめて違うところはどうだっという話をされてたような時代があったりしました。しかし、そこからでも親の姿を見て、後継として残ってくれた子ども方もいます。

やっぱりそこですかね。まだ残る、引き留めるだけの魅力が発信されてないっていうところにもなるかなと。

——子どもの頃と言つことですが、横田さんは今、何歳ぐらいになるんでしょうか？

横田主幹…私ですね。四五になります。そうすると、二三年。平成五年から役場に入ったんですけど、大災害の時間がちよつと転機になって、皆さん漁業で言うとそこでもうやめてしまつという方々が出て、そこがちよつと転機になったかなと思います。そこから復活するまで時間がかかりました。その間で漁業つながら子ども方は違うところで就職とかそういうのが多かつたんではないかなと思われれます。

——農業は。

満島課長…農業に関して、やっぱり新しく始めるつていう方はいなくて、自分の親がもともと農家だったりとか、そういうところから今の年配の方たちもそのまま続いていたですよ。で、今農業をやっている人は、新たに新しいものに取り組むつていう時世でない農家さんが多くて、今例えば田んぼ、お米をやっているのであれば、自分で今耕している田んぼがあつて、お米が取れるから八〇代の方であればそこがあるので、やめるわけにもいかないし、やればやれるからやつてるつていう形です。五〇代の方たちつていうのはやっぱりまだまだ元気な方もいるので、お米だけじゃなくてアスパラとか、肉牛。牛もやつてるんですけど、そういうところでちよつと複合経営しながら別の仕



事も持つて、例えば土木建築業の仕事も持つてたりとかしながら複合的にやってる方もいます。それが奥尻の農業の事情なので、なかなかそこに新しく雇用を作れるというのはなく、最近ワイナリーの部分で若い方であったり、道外や海外、島外から来る方を受け入れて雇用につなげてるといふ点があります。

——奥尻小学校さんが果樹園をお持ちですけども、あれはそういった新しい農業のこともある程度視野に入れてのことでしょうか？

満島課長…そこまではきつと、そこに長期的な視野はきつと持つてないとは思いますが、やっぱり地元にある土地柄。そういう生き物というか、農作物に携わることでそういう関心を持つてもらえるという点で果樹園を持つてたり、あと田んぼも青苗の方の学校では田んぼ借りて、そこで少しはお手伝いをしたら米収穫するとかそういう教育を行っています。しかし、長期的に言う後継者にまでつていうスパンではないのかなと思います。ただ、町のその作業に関心持つてもらおうという点で、授業に取り入れていると思います。

2 今後、奥尻島で必要とされる地域人材とは

——水産農林課さんの視点から見て、今後必要とされる地域人材はどのような人材ということになりますか？

横田主幹…今、漁師の人は年配の人は昔ながらの漁の仕方し

かできないってところが一番大きいと思うんで、やっぱり最先端から機械いじりからそういうのを今までにない漁業の仕方っていうのを学んできてもらって、それで地域に浸透させてくれればもつと今の漁業の人方も楽に漁できたりとか、楽に水揚げが揚がったりとかそういうところをやっぱり年配の方たちに教えていけるっていう方々が来るとやっぱり漁業はもつともつと今から脱却できるのかなっていうところはありますね。

——地域によっては、流通を変えることで漁業を振興しているところもあると思うんですけどもそのへんの地域人材はいかがでしょう？

横田主幹…そうですね。今、奥尻町では地域政策課の方でも、流通関係とかも担当しているんですけど、うちの方だとやっぱりフェリーとかで漁獲物を運ばなきゃいけないとか、その後の販売網とか、組合自体が販売に携わってるんですけど、やはり販売に昔から強くないっていうところで、漁業者の方々も物かもつと高く売れば、当然もつと漁獲が少なくて、資源管理しながらでも大丈夫だし、多く取れた時は多くお金も入ってくるというところで、やっぱり販売の問題は、漁業者も何とかできないかっていうところは多く話が出ます。やはり販売として組合として動くにあたっては、漁業者のものを全部捌けるような形の態勢しか取れないのかなっていうところは現状かなと思います。販売に精通してて、販売網でちょっとでも高くとかできていければ多く捌いてっていう。そういう方々も必要とされると思えますね。



満島課長…今は、六次化って言って自分たちで獲った物を加工して、全部それを自分たちで流通して、ずっと全部やれるような仕組みがあります。ちょっとそこまでセットしてるところっていいのはなかなかね、全体的には浸透しないよね。やれている方もいるんですけど。それも大きく町全体で浸透させているかって言ったらそうじゃないな。

——ここで育って外に一旦出て、Uターンで戻ってきて何かをやってもらえたらと思うんですけども。

横田主幹…そう思いますね。そう思います。ただそういうためにやっぱり地域で馴染んでないと戻ってこれないと思いますので、お世話になったとか恩返しに帰ってくるのかやっぱりそういうのがあると帰ってきやすいのかなっていうのはあります。

——今、おっしゃった言葉の中で地域に馴染んでいるとかお世話になったなという部分を別の言葉で表すとどんな若い人たちについていうことになるでしょう？

横田主幹…今だと、きつと高校生だと島外から来てて、島親とかっていう形で親代わりとかをやったりもしてるみたいですので、その中でやっぱり島のお父さん方に戻ってきたら恩返しっていう形かなと思います。それは島外から来てる子方だと思います。あとは、島の子ども方にしてもやっぱり地域の例えばお祭りに出て楽しんだのがあったりとか、島がちよっと大変だよってことになることやっぱり島のために、もしかしたら大企業に就職してて、偉くなって、島のために何かした

いなくなっていう心を持っててくれるかもしれないと思いますので、そういう些細なことからもやっぱり高校生もやっぱり祭りなど地域行事にも参加したり、ボランティアもしてくれたりとかして、みんな一緒にやったりしてると思いますので、そういうのからかなと思います。

——将来が楽しみです。農業でも同じようなことがありますか。

満島課長…そうだと思います。同じです。例えばワイナリーでいらっしゃる方たちっていうのは、どこかで経験を積まれてくる方もいるんですけどもやっぱり奥尻のやり方と向こうのやり方が違ったりとかして、「島じゃこうなんだ」とかそういうふうに思われる方もいたりとかする中でいくとやっぱり一回島に来てみたいっていう思い。来てみてさっき言った馴染む、馴染まないもあるでしょうから。そういうカテゴリーの中にそういう農業がもし組み入れられるのであれば、ぜひそれをきっかけに求めてもらいたいとか、あとは残ってもらいたいと思いますけどね。

3 地域にとつての高校と協働する意味

——今、協働という言葉を使っていますが、昔は高校が地域を利用して、教育を良くするという言い方だったんですけど、今は高校が町が元気になるのを支える、あるいは高校が町と一緒に元気になっていくという意味で協働という言葉を使います。高校と協働することについて町の立場からはどのような意義を感じていますでしょうか？

横田主幹…こうなるとより一層、身近に何かやるっていう感じかな。押し付けてなくて。そういう感じに思いますね。

満島課長…今、高校といろいろやっているのは、高校が授業の中に地域の人を呼んで町おこしワークショップっていう形をとっています。中に当然、観光もありますし、いろいろあるんですけどその中に漁業だったり、農業だったりがあります。そういう分野の中で興味を持っている子どもたちが実際に島の現状を聞いて自分たちの思うことを、さっき横田からも言ったんですけど、何ができるかっていうことを考えてそれを提案します。

実現するかしないかはさておいて、そういうふうに分たちだつたらこうしたいっていうふうな考えを持っていける。そういう考え方ができる授業って今までなかったんですね。

それが今、続きますので、一年生から例えば島留学生であれば奥尻のことって何もわかんないで、高校が好きで来てるんですけど、そこでちょっと知ったことで、奥尻のことはもちろん深く知って、二年生になるとさらにもっと深く知って、三年間で地域のこと学べると思うんで、そういう意味では町おこしワークショップっていうのは面白いと思います。一年目でやった子と二年目に同じ子と会うことがあるんだけど、やっぱり違いますね。成長の度合いが。

——成長についてお伺いしたいのですが、例えばずっと島で育った子は島のこと知ってるはずだとも思うんですが、いかがでしょうか。

満島課長…意外に知らないと思いますね。やっぱり学校っていう大きい括りの中で、そんなに深くは携わってなかったんじゃないかなと思います。高校になるとやっぱりグッと違いますね。それを授業として考えるということをやっていることなんで。そういう意味では違うと思います。

——成長したと思うのは、どんなところを見て、どういうふうな成長したというふうな考えましたでしょうか？

満島課長…単純に言うと、(一年目は)聞くだけだったのが二年目になると自分たちからわかんないことを当然また聞くんですけど、こうした方がいいんじゃないかっていう提案をちゃんと言ってくれる。現状をちゃんと知って、どうしてこうなったのか疑問に思ってくれるっていう。疑問に思うということは多分何か自分の中ではモヤモヤしたところがあつて、もうちょっとこうしたらいいかもねっていうのな

んで。町おこしワークショップの中で僕ら考えを引き出してあげればいいと思うので、そういう形のやりとりになります。一年目はやっぱり何もわかんない中で、ただ一方的に聞いただけかもしれないですけど、二年目になったら疑問に思うことを考えて、それをちょっと僕たちに話してくれるっていうのがすごい成長だと思います。

——ちなみにその提案とか疑問というのは、高校生ですから外的な部分もあると思うのですが、満島課長さんの視点から見ると、その提案をどんなふうな思いましたか。



満島課長…僕らは一個でもいいからやってあげたいなって思いますね。高校生は、非現実なことを考えているとは思っていないんです。やるんじゃないかなと思ってはいるんです。二年目とかになると「なんで俺たちの言ったことやってくんないの」っていうぐらいの気持ちで言ってくるので、何でもいいからとりあえずよく話し聞くと、僕らの視点では思わない素晴らしいことを考えてくれることもあるんですよ。

横田主幹…子ども方はやっぱりお金抜きとして自分の構想をそのまま話してくれると思います。うちはもう最後にはお金のこと考えながらの発言になりますから。そこがまず子ども方は違う感じかなと思います。そのせめぎ合いは面白いですよ。高校生は最後になると「お金がないと何もできないんですね」って話にもなりますし、でも僕らはそういうこと求めてないので。お金があったらやってあげたいですっていう話になりますし。

— お金がないとできないというふうになってしまっただけで終わってしまう？

横田主幹…何も終わってしまうんで。

— 多分、新しい産業が興る時っていうのは、労力と頭で解決するのだと思います。東京の工場でやることと同じことをここでやってもらういくはずなんです。ということ、この島でできること、高校生たちがこの島に合った何かを提案できるようにすると学校教育的には、

いいとこまでいくのかなと思うんですけども。

横田主幹…あとは考えただけで終わらないようにほんとに一つでもそれを完成させたいけど、行政はやっぱりそこ考えるんですね。よく話するのは。

満島課長…形がドストレートに同じもんじゃなくてもいいんだから、君たちのヒントがこうなったんだよってという物を僕らが何かやってあげたいってのはいいと思いますね。

横田主幹…ほんとに、やった結果、次、何かを変えなきゃっていう、子ども方も次のステップになると思うし。

満島課長…中には旅行会社にそのまま持つてたら商品になるんじゃないのかなっていうぐらいのものもあったりとかしますよ。発想で。というところは、もう僕らよりもずっと考え方が純粋に考えてくれるところもある。どんどん入ってきたから、やるだけ楽しいですね。

—あと、若い人に売れるものは、やっぱり若い人が考えたほうがいかもしれませんか。

横田主幹…それは。売れ筋はそうですね。

満島課長…ほんとそうだよ。

4 水産農林課が高校との協働に至った背景と経緯

—それでは、高校と協働するに至った背景とか経緯とかを教えてくださいいただけますでしょうか？

満島課長…これ言ってたのは、担い手。

横田主幹…そうですね。やはり一番最初のところでいくと、町の方でまず人材を育成しようっていう勢いでスクーバ（スキューバダイビング）授業で協働しました。高校は普通科高校ですので、高校ではなかなか単独ではできない中だったので、町の方でインストラクター呼ぶお金とかを支援して、それからスクーバ授業っていうのが始まって。

横田主幹…平成の災害後かなと思います。

満島課長…七年か。

横田主幹…そのあたりから一緒にやっていくような形になっていくのかなと。それでようやくうちも一年、二年前に担い手協議会っていう協議会を行政的な要素なんですけど、そういうのを立ち上げて、いろいろ高校生の活動の報告やら、担い手的なところで農家だったら農家の体験とかを高校生全員に報告してもらったりとか、そういうのかなと思います。まず、スクーバから始まっているっていう感覚です。

満島課長…スクーバ授業が今に至ると島留学生の方たちが来る一つの決定理由になったりとかしてるところもありますので、奥尻の魅力だったのかなって思います。

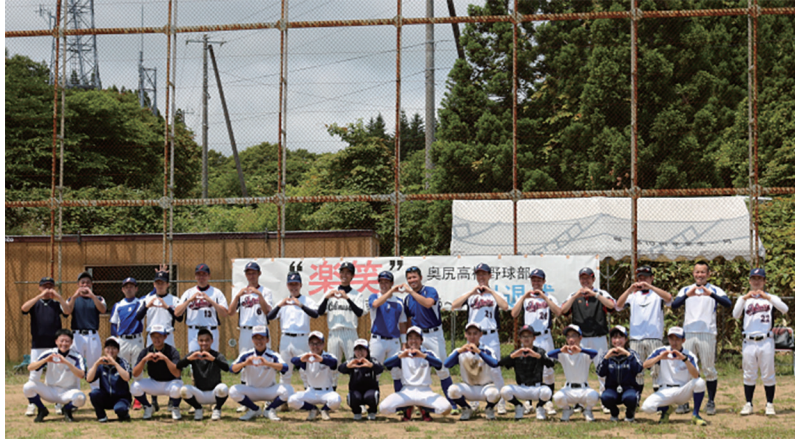
——地域未来留学フェスタというのが去年から全国規模で始まっているんですけども、スクーバダイビングのポスターがすごく目立っていました。

満島課長…青いですね。

——私には印象的でした。教頭先生から話を聞いたところでは、町立移管したあたりから、またこのスクーバダイビングを支援するシステムが発展したというふうに向っています。

横田主幹…これ、町立の高校になったっていう意味だと思います。それで教育委員会の方が所管にはなるんですけど、今まで支援っていうお金だけのつながり。補助金っていう形での関係から、やっぱり町立っていうことで、自分たちのついでというわけじゃないですけど、自分たちの高校っていうわけじゃないんですけど、それで携わることが多くなったりとか、前から父母会もありながらなんですけど、大体OBの方々も役場にいたりとかでそういうのかなとは。やっぱり町立で身近になったのかな。ここをなくすわけにいかないというのもありますけどね。





満島課長…気になる。気になる一つで。

横田主幹…町立っていう。

— 気になる度は変化しましたか？

横田主幹…われわれの事務的にはそうだよ。関わることは多いと思いますね。あと、島外から来る子も関心持って来ている。もともといる子たちは島に残る子も出る子もいるっていう中で残る子もいるんですけど、島外から来て、奥尻高校の授業をやりながら高校生活をやってきたっていうふうを考えていると知ったら、奥尻高校は相当魅力があるのだなということを逆に気付かされました。町立移管されてから、そこに気付かされました。

今まで高校生がどこに就職するのとかってあんまり気にしなかったけど、最近だとあれかな。どこに行ったとか、島に残ろうとしているとかさ。そういうのもちよつと気にするようになってきたかなど。

— 次の四月から、町おこしの子たちが就職、進学を始めるわけですか？

満島課長…そうですね。一期生がね。今年の三年生がね。それで留學生の子では島に残る子はいないのか。いなさそうですね。

横田主幹…最初から少ないグループだよ。

満島課長…でも、気になります。すごいお仕事好きになってますよ。その子たちは。

——昨日、生徒さんにインタビューをしました。面白いのは奥尻のこ
と好きだという言い方が、島外から来た生徒さんの場合は「この町は
故郷だから」と言うのとは違う言い方でこの町が好きだというふう
に言っていて、島外から来た人の奥尻愛というのは、もともと地元で育つ
た子の奥尻愛とは少し違うように思いました。

満島課長…違うと思います。

5 協働の体制・組織・運営

——それでは、今現在の協働の体制とか、組織とか運営について教え
ていただけますでしょうか？

横田主幹…これはでも、高校から直に課長の水産課長の方との連絡も
ありますからね。

満島課長…体制としては組織図とかいろいろ決まりごとはあるんです
けど、やっぱりお願いごとに関しては学校から直接。われわれもそうい
うふうにしてこれという言い方をしてるんですけど、ほんとに困つ
たことだったり悩んだことがあったら何でも聞いてもらって、できる
範囲であれば一緒にやってみてくってという感覚なので。

横田主幹…そこから窓口になっているものたちもあります。今、電話
しやすいなだわ。きつと。そこからうちの方で行政内で調整をかけれ
ばとかそこにはなってるかなと思ってるんで。

——あと、島の人を紹介するようなこともここが窓口になるわけだ
か？

満島課長…どうでしょうね。きつと、教育委員会の島おじだったり
かそういう制度でやってるんですけど、われわれは今水産の部分だけ
とか、担い手の部分だったり、町おこしワークショップだったり、関
わりとなれば水産関係とか第一次産業が多いので、そういうところに
何か学校で関わってみたいってなったらダイレクトで来るっていうの
が多いですね。

横田主幹…うちから人の紹介とかつてなるとやっぱり漁業の体験、農
協の体験になれば漁師さんとか農家さんかなと思う。

満島課長…そういうの紹介するのは僕たちが役割で。

横田主幹…そういうのがあってそうですね。きつと。

満島課長…先生方も若いからみんなほんとに興味持って一生懸命やっ
てくれるんで。

——若い先生が直接電話掛けて来たりしますか？

満島課長…来ます。

— あつという間の成長ですね、先生方。

満島課長…携帯電話でも来ますよ。なんでも電話くれて。先生方よく言うのが、なかなかきつとそれが大きい学校だったり、向こうの学校に行くときつところはならないって思いながらやってますよね。きつと奥尻だからできるんだなって自分たちで思いつつも、ちゃんと高校の良さとしてそこをちゃんと。

横田主幹…忙しいだろうけどそういう課題を預けられてこなすという先生方も成長しなきゃいけないような新任の先生っていうのはさ、そういう若い先生多いからそういう流れだと思っわ。

— 新任の先生が来て、先生成長したなと思うようなところはありますか？

横田主幹…多分、今二六、七歳の先生ですら中堅になってますから。三年から四年ですね。そこ新陳代謝が結構激しいと思うんです。学校の中で、その中でちゃんと回っているってどうか、先生方がみんな一生懸命なんだと思いますけどね。

満島課長…それぞれが分野が与えられて課題を解決っていうわけではないけどさ、そういうのができてるっていうのが成長。うちらから先

生方の成長見るわけではないんだけど。きつと校長先生方、教頭先生方にするそれだと思っわ。やってもらって、やらせて。そしてそれが。やらせてると思います。完全に。だから教頭先生から例えば頼みにきて、親代わりじゃないですけど、頼みにきて、こういう先生が行くのでよろしくっていうことはないです。直接若い先生が（連絡してきます）。

— 先生方でもっと地元を知りたいとか、先生たちなりの地元愛みたいなのが。

満島課長…多分さっき言った町おこしワークショップとか、先生方、多分一緒に授業受けてると思うんですけど、先生方きつと言葉には言わないけど、初めて知ったこととかいっぱいあると思います。「そうだったんだ」とか。だから子どもたちと一緒に学んでると思いますよ。

横田主幹…先生方みんな聞きに来るもんね。空いてる先生方全部入ってるんですよ。あれきつと。

満島課長…こないだ言ったのは、林業も島にあるんですけど、自分たちで林業を知らないのに、生徒に「島の林業支えろ」って言ったって支えれないし、農業だつてそうだし、漁業だつてそうだし、そこは一緒に子どもたちと考えるんじゃないかなって感じしますけどね。ただ、大学卒業したばかりで、都会から来て島のこといきなり知ってたってそれはもう全然もう授業教えられるかもしれないけど、地域のこと教えるっていうのはもつとエネルギーがいたり、人を知

らなきやいけないことになると思うので。そこをやらされてるっていうか、もう任せられてるんだからすごいなと思います。先生方ももしかしたら島を出ることは絶対あると思うけど、違うところに行ったら、感じることはあると思いますね

6 ご苦労されている点

— それでは、ご苦労されている点について。

満島課長…何かある？

横田主幹…やっぱり……。

満島課長…成果に結びついてないっていうのがあると思う。

横田主幹…高校生の受け皿が少ないって言うんですかね。例えば漁業だったら、一人親方が多いもんだから、

満島課長…漁業の仕組みね。

横田主幹…雇ってやる漁業っていう感じでないんで、それが例えば島に残りたいって高校生が言ったとしても、そしたら何の仕事に就いて残っていけるかっていうその受け皿が少ないっていうのがやっぱり一番かなど。受け皿を用意するための苦労があると思います。



満島課長…今でも完成されてないもんね。

横田主幹…そうなんですよ。これから受け皿ちよつとうちらも限界があるしな。どこまでできるかっていうのでやっぱり結果的に。

満島課長…留学生とかも例えば漁師になりたいって言った時に、ハードルがいくつか生まれるんですよ。それが今、ハードル全部に取り組まないといけない状況があったりとか。そういうところはちよつとあるよね。

横田主幹…ある。ほんとに島の中から求人出すのもほとんどないような状態だと思うから、そこを出せれるように障害取り除くっていうのがちよつと今まだできてないかなと思いますね。

—そうしますと、いわゆる新規事業を作っていくようなあるいはスタートアップと呼ばれてるようなそういった仕組みが島の中にはまだあまりできていない？

満島課長…少しでき切れてないと思いますね。

7 うれしいこと

—わかりました。次にご苦労されていた点の反対側をお聞きます。一緒に協働して良かったな。島にとってプラスになってるなと思うところ、あるいは担当者としてうれしいなと思うようなことがありますで



しょうか？

横田主幹…いいことの方でいくと、高校があるだけで、町の中で若い者がいるっていうこと自体。それじゃないと夕方になれば人っ子一人歩かないような状態だからさ。

あと、病院に行くようなおばあさんがバス停にいるようなとかそういう中でやっぱり高校生がバス停にいただけでも、やっぱりちよつとでも活気の面が見えてくるのかなというところがまず一つかな。些細なことでもそれでもそういうのからっていうような、そこがまず一つかなとは思っています。

満島課長…高校が地元に残るっていうのは、中学校までと全然違う。特に離島だと顕著にそこってわかりやすいと思うんですね。

もし中学校だけだったら、若者が高校行く時に島外に行っちゃった時点で、これだけでも地元に残る若い人たちっていないんだなっていうことになります。高校があるだけで三年間の中でもうちよつと島の中のことを考えることができたりとか、それが直接的に響かなくてもさっき言ったようにいるだけでも、イベントに子どもたちがいるだけでも、大人が考えたことにいるだけでも活気があり、自分たちが考えたことやるだけでも活気があると思うので、これはもう大事なことだと思えます。見るもんね。子どもたちいろんなところだね。会うしね。

——ちなみに高校生たちは多分町の人が自分が誰かを知ってるというふうに思っていますか。

満島課長…思っていると思いますよ。

——少なくとも住んでるところの周りの人は、仮に島外からきた生徒でも…

満島課長…うん。どここの子だなというのは別として、そうじゃなくても高校生、地元の高校生で留学生の子だなって。

横田主幹…そうだね。名前までいなくてもね。

——授業サボったりしたらすぐ情報が伝わるんじゃないかと。

横田主幹…そういう暇もなさそうだもん。高校生。

満島課長…今の高校生忙しいですよ。

横田主幹…課題が多くて。

満島課長…俺たちは奥尻高校卒業だけど、俺たちのころとは全然子どもたち違うなと思います。忙しいよね。

横田主幹…そう思うな。

満島課長…いろいろやってるなと思うもん。

——ちなみに満島課長さんのところは何クラスあつたんですか？

満島課長…僕の際は二クラスでした。二五人ぐらいが二クラスか。

横田主幹…多めっていうかあれだね。

——そうすると、中学校から高校に行く人が五〇人だと。

満島課長…そうですね。オール島内ですね。

——でも、課長さんの感覚からすると、生徒数は減ったかもしれないけども、賑やかさは今の方があるということでしょうか。

満島課長…見てるといろんなことやってるなっと思えますね。町の人たちに顔出す機会が多く感じますね。

——よく言われるのは、町の活性化という時に、人口増だけを考えてしまうとあまり良くないと。人の口の密度のほうの人口密度を高くするのは難しい。そういうのをねらわずに人が交わる密度のほうの人口密度が高くなる方が先だと。まさに今、奥尻高校さんがやってるのはそういうことなんだと思います。あと、この役所も元気ですよ。全体に。

満島課長…元気なのかな？

横田主幹…だいぶ人も昔より少なくなってきたり、サボってる、サボってるって言わないね。ちょっと業務量多くなってきたりからその分精神的に動かないと。

——人の交わる密度の人口密度が高いっていうことですね。

横田主幹…やっぱり問題があれば行くし、高校でも相談あれば行くしとかっていうそこは。

——まだ高校生から直接問い合わせとか、依頼が来たりはしないんですか？

横田主幹…先生を通してくるとやっぱり高校生もテーマで研究したいとなつて、物が借りたいとなればやっぱり先生経由でまた来るような感じでね。

——最初は先生経由で、一度そうなつてしまえば。

満島課長…そうそう。そうなると直接的に。

8 インタビュー後のフリートーク

——ここまで私の方から一方的に聞きましたが、何かこういうことは伝えておきたいとか、これは知ってほしいというようなことをお願いします。



満島課長・僕が思うのは、島外から来てくれる子どもたちがすごいのは、聞くと、ほんと自分で見つけて来てるんですもんね。親に聞くと、親もどうやってかわかんないけど、調べて私ここに行くとか、ここに決めたってことです。そういう時代なんだなって思いましたね。

特に道外からいらっしゃる子たちっていうのは、もう数ある周りの中からここを選んでくれてっていう。それはすごいなって思いますね。自分でこういう何もないことをわかって来てると思うんですよね。それでもここを選んで、馴染まない子もいるかもしれませんが、馴染もうとする力っていうのはすごいなと思います。これからどんどんそういう子たちが、地元の子はもちろんいながらも、来てくれたら。ずっと続けて来てもらえたらいいなと思います。

急にパタツと来なくなったりとかしたら、またどこか違う町で魅力ある学校できたのかなとか思うかもしれない。でもそういうふうにならないように奥尻高校の教育が魅力的になってくれたらいいなと思います。それは思います。

——当面この学校は大丈夫だと思えます。お金を頼りにしたり、従来型の大学進学のための教育だというようなやり方ではなくて、生徒が、満足できる高校時代を過ごせるように、自分たちで工夫できるようなやり方をしてるので、その部分で生徒さん来てますので。

満島課長・そうですね。個性相当あると思うな。学校の先生、多分ね。比較的内りやすい学校だから、入ってからも自分次第でいろいろ可能性伸ばせるっていう。



——あと何か質問とかそういうことありますか？ ほかの高校と比べてどうなのとかそういうのは。

満島課長…離島の学校は周られたことかかってあるんですか？ 今回は奥尻にいらっちゃったっていうのは、やっぱり奥尻高校の活動どこかでお目見えしながら？

——私は、地域みらい留学フェスタという全国募集をする集まりで奥尻高校のことを知って、あとはインターネットで調べたり、噂を聞いてここに来ました。ここまで離島なのは私は初めてです。

満島課長…でもぜひこうやって先生みたいに興味持たれて島に来ていただくこともすごい僕らはありがたいことだなと思いますし、実際こうやって直接話することって多分、学校の関わりがなかったら多分なかったと思いますし、そういう意味ではつながりってすごいなって思いますね。

——奥尻高校さんが熱い思いを持っておられて、いろんな工夫なさっているから、これまでの大学の先生も来てるし、私も来てるんだろうと思います。

満島課長…そういう関係でいられば楽しいですね。

——本日はお忙しい中、ありがとうございました。

☆なお、高校生と奥尻町役場が協働した成果として日本酒「奥尻」が醸造された。
次のウエップ記事を参照していただきたい。

「奥尻で紡ぐ、新しい未来の可能性 ～日本酒「奥尻」の誕生編～」

<https://localhipponniji.com/5920/>

報告⑧

(特集)各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(下)

地域学校協働への役場の期待

——産業の変化と教育の方法・目的の共有化—— (奥尻町役場地域政策課)

青山学院大学 樋田 大二郎

奥尻町役場地域政策課の幅口一路主幹と羽立仁主幹にお話をうかがった。

奥尻島の水産業では近年捕れる魚種や漁獲量が変わってきている。観光業では大きな温泉ホテルの撤退とフェリー航路の縮小があり観光を取り巻く環境が変わりつつある。このような変化の中で、お二人の主幹は水産業や観光業の転換の可能性を考えている。水産業では新しく捕れ始めた魚種のブランド化や養殖漁業の開始、観光業では着地型観光や個人客の呼び込みの開始である。

こうした可能性の中で必要となる地域の人材というのは、「いろいろな人を結びつけられる人」が必要になってくるという。町内で水産業と農業をうまくつないでいく、それらと観光業の人とをうまくつないでいく。さらに島外とのつながりをうまくマッチングできる人である。

地域と高校の協働については、必要な能力を育てるという意味や現時点での提案の有効性という点で、お二人は肯定的である。

僕が高校生のときに、あんなに町のことを考えて何かをつくるとかつていうことができなかった。それが今の高校生ができるっていうのは、すごい頼もしいと思っております。そして、高校生の世代にしか見えない世界があると思います。色使いがあると思います。そういった意味からも、発信してもらおうとありがたいです。(インタビュより)

例えば仕事してても、自分の意見をぶつける力っていうのは、

これから必要になってくるだろうし。例えば、今まで意見できなかった人とかも、そういうようなもので変わっていくっていうことを考えると、成長なのかなっていうふうに。(インタビューより)

興味深いことの一つに社会貢献の変化がある。都市の下町や地方郡部などの伝統的な共同体が生き続けている地域では若者の社会参加は共同体の日常の中に組み込まれていて、若者は無意識のうちに(自然に)社会貢献する。これに対して、高校魅力化で伝統的な共同体が生き続けている地域において、高校生は無意識の貢献に加えて、問題意識と当事者意識を持つて地域社会に働きかける。自発性、主体性、問題意識などの言葉で形容される社会参加である。インタビューでは、このことと関連して、奥尻には高校生の地域社会貢献の場合は町立への移管以前からあった。しかし、高校生は以前は頼まれて貢献していたのが、町立移管後は、自分たちから言うようになったということであった。

今は、自分たちで発案してやるんですよね。……自分が社会教育にいたときは、高齢者が「若い人と交流したい」とか、「子どもも孫もみんな遠くにいるんだけど、そういう孫の世代の高校生とかとちよつと話したい」とか、そういう要望があったりとかして、そこを結びつける役割というのを社会教育でやっていたんですよね。

……今は高校生は自分たちでやることを、自分たちで考えてやっている感じなんですよね。だから、今と以前とはちよつとタイプが違うような気がします。(インタビューより)

また、お二人は高校生の取り組みについて高い完成度や成功することに拘らない。失敗することにも意義があると考えている。

「自分たちでやりたいって思うことを、やらせてあげたい」っていう気持ちはあるんですよね。

例えば、それが失敗であっても、「じゃ、次どうやったらうまくいくのか」っていうことを考える機会になるだろうし。そういう経験っていうのは積ませてあげたいっていうのは、ほんとに思いますね。(インタビューより)

失敗から何を学びとるかっていうのが、成長の過程で必要なくて。『どっこういうような計画と、どっこういうような思いがあつてこれを作つたんだ』っていうものと、それでうまくいかなかったときに考察する時間つて絶対必要だと思つるので。(インタビューより)

さらに、高校生には完璧さを求めないで良いと語る。それは町の立場からだけでなく、高校教育の意義の立場からもそう考えているように感じられた。こうした姿勢は、生徒の地域課題解決の到達度の高さよりも、地域課題解決型学習の学習の深さへの関心を示しており、「(奥尻高校で)問題解決力と適応力を高めてもらいたい」という表現に表れている。お二人の語りは、地域課題解決型学習が成果や貢献度にとらわれてはならないことの警鐘と言える。

自分たちの足とか目で稼いだ情報で、それを疑問に思つたこと

を素直に発表できるっていうことの方がいいかなっていうようなことが、今の自分の考えとしてあります。(インタビュより)

問題解決力っていうのは、多分、今から積み重ねてやっていくことで、将来例えば、自分は就職したときとかに役に立ってる知識だと思えます。……「今やることが、じゃあ直接地域にすぐ反映できるか」とか、そういう部分はやっぱり自分たちもあんまり考えてはないですよ。ただ、この奥尻の高校生として、やっぱりそういう問題解決力と……自分はその環境に合わせられる適応力っていうのか、っていうのは、その問題解決力と適応力をこの高校で高めてもらいたい……。 (インタビュより)

最後にお二人のインタビュウから感じられた、小さくてつながりが豊かな町(コミュニティ)で、高校が町立へ移管されることの効果を三つ述べたい。

第一は、内発的な擬似コンソーシアムについてである。お二人は、一方で奥尻町の地域課題を見据えた上で今後の地域人材の資質を考え、他方で同時に高校教育の意義の視点から奥尻高校生の教育を考えていた。奥尻高校は「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(文科省)」が提案するようなコンソーシアムは構築していない。しかし、奥尻高校の取り組みに協力・参加する過程で、お二人は地域の視点と高校教育の視点を併せ持つて、奥尻高校の地域課題解決型学習に深く思いをはせていることが印象的である。小さくてつながりが豊かな町(コミュニティ)があり、その町の高校の町立移管を行ったときには公的なコンソーシアム組織を構築していなくても、インフォーマルな



ながりの中で地域と高校が協働できている。

第二に、行政内の担当部署ということでは、教育や水産、農業についてはお二人とは別に担当者がいる。しかし、お二人は縦割りの担当者意識からではなく、教育と産業の連携に深く関心を持っておられた。小さな役場だから全体のことを考えることができるという側面があるのだろうか、それだけでなく高校生を町全体の中で育てるといふ視点に立って、さらには町の活性化過程の側面の一つとして高校教育の魅力化を考えていた。他の町での訪問調査の折にも同じことを感じるのだが、高校生の地域課題解決型学習を支援する者は高校と町の関係に對しての当事者意識が同時に高まっている。

第三に、お二人が強調したことは奥尻高校との間で、教育についての考えをもっと共有化したいという希望であった。文科省から降りてくるのとは違う、現場からの地域高校協働の展開があったら、奥尻町の事例にその萌芽が読み取れる。繰り返しになるが、つながりが豊かな町の町立移管であり、現場からの内発的な協働だからこそもっと知りたいという願望や、もっと共有化したいという願望が容易に芽生えたように思えた。

奥尻町では、地域人材を育成する教育動向と高校教育を魅力化する教育動向の交点で、形式面での制度とは別の協働が芽生えている。そしてその協働では知りたいとか共有化したいとかの願望が育っている。

町役場から見た地域人材に必要な資質、そしてその資質を主体的に育てるための配慮あるいは資質を育てるための町役場と高校の教育的配慮についての意見の共有の重要さなど、とても貴重なことを教えていただきました。お忙しい中、お時間をいただき、ありがとうございます。

ました。

1 水産業と観光業が変わりつつあること

— それでは最初に、「地域活性化の状況について、今この奥尻島がどうなっているか」、「どんな取り組みをなさっているか」教えていただきたいと思います。

幅口一路主幹：地域活性化という言葉はちょっと漠然として、お答えづらいなとは思ってはいるんですが。実際のところ、私もが携わっているとすれば、産業の増加に入っていくのがメインになっていきます。役場の知事部局としては、そういうようなかたちになっていくと思っています。

— そのなかで、新しい地域資源をどう活用していくのか」という課題への取り組みを始める状況だと思っています。

今まで水産が基幹産業でした。ところが、今までやってきた魚種が捕れなくなるという転換点を迎えています。「そうしたときにどうするんだ」というところに、今直面してきているのかなというのが、今の町の状況だと思います。

— 当面のというか、直近の課題は、「水産業自体が今変わりつつある」というところですか。

幅口主幹：今まで捕れていた魚が捕れなくなってきたという状況がありますので。今までの形態の水産業では、もう成り立っていない

なくなる。これがまた、劇的に魚の捕れる量とか変わってくれば、またそこはそこで昔の方に戻っていくとは思っていません。

羽立仁主幹：観光も、私は観光を担当してはるんですけども、例えば、ホテルの撤退とか、あとフェリー航路の縮小だったりとか。観光を取り巻く環境は、だんだんきびしい方向に行ってると思うんですけど。ただ、マイナス要素ばかりじゃなくて、例えば個人旅行者が増えるような現状で。例えば、飲食店に行ったりときに、直接その観光客と飲食店の経営者がお話しする場があったりとか。そこで例えば、奥尻の知識を少し知って、楽しい旅になったりとか、島民と観光客が触れる機会っていうのも、増えているのは事実だと思います。

そのような中で、自分が担当している島の景色とか料理とかも魅力的なものだと思うんですけども。やっぱり、ここに住んでる人のやさしさっていうのが、そういうのが魅力の一つだと思っています。

団体旅行で行くところが決まっていたただ回って歩くだけだと、そういう部分に触れることもなかったりしました。ほんとの奥尻のよさっていうのは、こういうきびしい状況のなかだけれど、これまでよりもよけい伝えられる機会が増えたんじゃないかなっていうのは、観光を担当しての正直な感想です。

人と人が触れ合って、奥尻に来たやさしさ、そういうのを体感していつてもらえたらいいなっていうのは思うんですけど。結局、来ていただいたお客さんを大事にすることが、次の観光につながるっていうふうに考えていて。人数は減ってしまうんですけども、そういう部分は強調できる部分なのかなと思います。

——そうしますと、観光は今変わろうとしているということでしょうか。

羽立主幹：そうですね、環境が変わっています。今までだったら、ずっと同じような環境で続いてきたのですけども。ここ数年、ほんとに大きいホテルが撤退したとか、フェリー航路の縮小だったり。あと、これからも、例えば宿の経営者が高齢化するとか、そういう問題で、今後維持していくのが難しい状況になってくると思うんですけど。

だから、そういう面で、例えば宿の経営者も、「食事を作るのがすごい労力だ」というふうになれば、泊食分離だったりとか。あとは、そういうので例えば、宿に泊まって終わりだったら、その人としか触れ合うことができないんですけども。いろんなところに出ることで、いろんな人と交流したりします。あとは、当然いろんなところに行くことによって、お金もそこに落ちるっていうかたちになると思いますので、そういうようなかたちを、今模索している状況です。自分のリーダーの考え方は、例えば、これまでは「おいしい料理や景色」をずっと言ってきたんですけども、「あれ、おいしかったね」とか、そういう思いは当然残ると思うんですけど、リーダーにつながるかっていったら、ちよつと薄いかなと思うんですけど。

でも、例えば、いろんな人にお世話になって、「また、あの人に会いたい」という気持ちや、リーダーにつながるのかなと思っています。だから、そういう関係づくりっていうのか、たまたま自分が例えば、よその町でたまたま会って意気投合した人が、「会いたい」と奥尻に来てくれることとか、よくあるんですけど。

だから奥尻で、例えばいろいろな一緒にやって、数年後に、「また、あ



の人に会いたいな」って思ってもらえるのが、一番リーダーとしてつなげるのかなって思っています。

奥尻って、観光も極端な話すると、あまり利益重視じゃないんですよね。何でも、安く安くっていうのがあって。すごくお客さんをもてなすことに力を入れるんですけど。「じゃそこから生み出す利益がどれぐらいあるか」っていうと、多くはないのです。でも、奥高野の経営者っていうのはそれで良くて、やってるんです。

ただ、私たちとしては、例えば稼げるときには、今までより少し稼いでほしいって考えます。結局、稼げないと、後継者にもつながらないし。そういうところが、例えば、自分の代で終わるんだったらそれでいいのかもしれないんですけど。

やっぱり地域として、それだと活力がなくなってしまうんです。少し、やっぱり利益を上げるようなかたちで、後継者とかにも「こういうふうにやったら支持される」とか、そういうふうなものいいんじゃないかなって思うんですけど。

あと、実感では、飲食店に行っても、宿に泊まっても、たくさんのものは出るんですけど、「じゃあそこまで高いか」っていうと、そこまで高くないっていうのをすごい感じますね。

——来る前に、インターネットで奥高野のことを調べていると、宿に関する記述では、「女将さんが親しく話してくれた」とか、「やさしかった」とか、そういうことがたくさん書いてありました。それはある程度、そう書いて貰ってうれしいと思われていますか。

羽立主幹…島の人は多分、外から来た人に対しても、そもそもあまり



警戒心がなくて、ちょっとフレンドリーっていうのかな、そういうような感じだと思います。

——昨日、神威脇温泉に行ったら、施設のお父さんと、もうずっとずっと話し込んで、いろんな話をしてくれました。

今夜、お店にご飯を食べに行けば、どこかの段階でお店の人が、横の人と私をつないでくれたりするでしょうか？

羽立主幹…そうですね。地元の人も、例えばお店の中にいれば、一緒に飲むこともありますし。ただ、例えば自分たちからしてみると、お客さんが、一緒にはまって楽しみたいんだったら、大歓迎なんですけど。一人でいたいのか、一緒に交流したいのかっていうのは、わからないんですよ。

だから、来てくれるぶんには、すごい歓迎なんですけども。そこを、例えば島民から積極的にに行けるかっていったら、そこもまた難しいところなんですよね。

2 高校生に将来どのような

地域人材になってほしいか

——つぎに、先ほど幅口様のお話で、水産業は、捕れる魚が変わってきた、あるいは、捕れる量が変わってきた、ということでした。今後、どういう方向に行くだろうという予想を立てていますでしょうか？

幅口主幹…そこは、専門である水産農林の方に判断はゆだねるしかないかなと思うんですけども。

今、新たに捕れてる魚種ですかね。「ブリが捕れている」とかっていう話が出てきていますので。そっち側の方にうまくブランド化をしていくとか、そういうようなものが、新しい今捕れるところに対応していくのが一つですね。あとは、昔から言われていることなんですけど、養殖にも、もう手を出さざるを得ないんじゃないかなってというような気持ちは持っています。

—そのような部分は、外の資本に頼ることになるんでしょうか。それとも、島の人たちで工夫することになるんでしょうか。

幅口主幹…基本的には、ブランド化とかっていう技術の部分では、やっぱり外とつながっていかないととは思ったりします。しかし全部中で完結するというのは、難しいかなと思うんです。

—難しいですか。

幅口主幹…養殖とかいろんなものでも、資本を呼び込むとか、島外から持ってこなきゃならないでしょうし。あと、許可を持っているのも島外だったりしますので。「何かをやるう」っていったときには、やっぱり中だけで完結するのは難しいかなと思っています。

—それでは、そういった状況を考えたときに、今後必要とされる地域の人材、あるいは高校生たちがいったん外へ出て行く可能性があり

ますけど。戻ってきたときに、「どういう力を持っていてほしい」とか、「どっついう思いを持っていてほしい」というのがありますでしょうか。

幅口主幹…必要となる地域の人材というのは、「いろんな人を結びつけられる人」が必要になってくるのではないかと思っております。

例えば、(外の人を)連れて来るだけじゃなくて、一緒に悩んでくれるような人材が求められる人材像になるのかなと思っっているんです。

あと、高校生について、島に定着してはほしいんですけど、なかなか、彼らも彼らの人生があるなかで、「戻って来い」とも言いづらく。「いざ、戻って来て、何をやってくれるの？」っていったところの、そのあんまりビジョンは描けてないかな。ただ、ここで暮らしてもらった三年間なり、ずっとここで育ってきた高校生が、何かについて、奥尻のことを思い出してもらえような、そのようなものがまず第一歩かな。高校生に関しては、第一歩かなと思うんですけども。

今なら、ネットが発達しているので、ここに住んでいなくても、いろいろ島のことに対して提案してくれたりとか、いろいろな力を貸してくれたりするっていう仕組みはできていると思いますので。

なおさらそこで、奥尻島に戻って来てくれれば、なおさらいいかなっていうイメージは持っていますけども。

—いわゆる、定住人口、交流人口の真ん中にある、関係人口という考え方ですね。

幅口主幹…はい。多分これからも、関係人口になっていくんだと思うんですけどね。

さつき羽立が言ったりリーダーに関して、関係人口の枠組みになっていくと思います。「定住してくれ」っていうのは、ちょっときびしいかなっていう。かといって、観光だけで終わらせるのもさびしいですね。

——そうですね。

幅口主幹…ええ。そうすると、関係人口が出てくるのかなと思います。

——大学生の場合ですが、中山間地域との交流で「第二のふるさと」という言い方をよくしますけども。そういう場所ができたということ、彼らにとっても、とてもうれしいことのようにです。

幅口主幹…ええ。ただ、そこがまだ歴史がなかったり、経験則が成り立っていないなかで、その人とどうやって地域が結びついていくのか。せつかく、第二のふるさとまで思ってくれた人を、地域の人はどうやって大切にしていくのかっていうのもありますし。そして、こっち側のものに対して、若者はどうやって返してくれるのかっていうのも、これからいろんな経験が蓄積していくと、スタイルは確立していくんですけど。一つは、それがいいなかで、アプローチする姿がちょっと難しいかなとは思ってはいるんですけど。

3 町立移管後の高校生への思い

——他の町でもこの町でも「若い人が働ける場所をつくってあげたい。

活躍できる場所をつくってあげたい」という主旨のことを、何回も聞いているんですけども。そういう思いっていうのは、昔からあったんでしょうか？ それとも、高校を町立移管した辺りから、また一段と変わったものになったんでしょうか。

幅口主幹…昔からは、あったと思います。やっぱり、若い人が来てもらうためには、ここ以外の人に来てもらうためには、雇用する場っていうのは絶対必要になりますので。

ずっとそうだった思いは昔からあって。その深さとか思いにいたるところの広さとかっていうのは、変わってきているかと思えますけど。根本は、昔からあったものだと思います。

ただ、そのなかで人口が減少していったり、自分の収入とかが減っていったりとかしたりすると、その世代が自信がなくなっちゃったのかなっていうのは、つくづく感じるんですけどね。

そこが、後継者問題になってくるんだらうなと思います。「うちの家業を継いでも、苦勞ばかりでいいことをさせることができないかな」という思いが、今の現役世代が抱えてしまった閉塞感が出てきているという気がします。

——高校生たちが、町にいろいろななかたちで出てきて、「こんなふうにしたらどうか」とか、「あんなふうにしたい」とか、いろいろな提案したりするわけなんですけれども。

そういうのは、町の人からすると、どんなふうを受け止めることになるんでしょうか？

幅口主幹…個人的な意見になってしまいうんですけど。僕は、すごいありがたいなって思います。というか、僕が高校生のときに、あんなに町のことを考えて何かをつくりたいとかかかっていうことができなかった。それが今の高校生ができるっていうのは、すごい頼もしいと思っております。そして、高校生の世代にしか見えない世界があると思います。色使いがあると思います。そういった意味からも、発信してもらおうとありがたいです。

あと、三年後、四年後には、彼らが主役になっていく、現役世代になっていくなかで、そこに出てからじゃなく、出ていく前の今のところで、そういう発想を持っていたりっていうのが、すごい心強いなと思っています。

——昨日、高校に行って、ワークショップをしているところを見ました。生徒が自分から積極的に発言していました。自分たちの高校時代、あるいはちょっと前までの高校というのは、やらされ仕事だと感じると適当に流していました。発表の時間が来ると、誰かが教科書に則した発表をする。奥尻高校はそれとはずいぶん違うなと感じました。そういった高校生たちの姿勢は、町の人にはどういうふうに映っていますでしょうか。

羽立主幹…いいことだと、自分は思うんですけど。あのグループワークなんかも、自分は、以前は教育委員会にいて、社会教育を担当していたんですよ。だから、そのころもグループワークとか、よくやっていたんですけど。

例えば仕事してても、自分の意見をぶつける力っていうのは、これ



から必要になってくるだろうし。例えば、今まで意見できなかった人とかも、そういうようなもので変わっていくことを考えると、成長なのかなっていうふうに。

あとは、例えば、この前の祭でも、高校生が「こういうふうにやりたい」というような相談があつて、自分たちとしては「どうやったらできるのか」というアドバイスだったりとかしていました。やっぱり、「自分たちでやりたいって思うことを、やらせてあげたい」という気持ちはあるですよ。

例えば、それが失敗であつても、「じゃ、次どうやったらうまくいくのか」ということを考える機会になるだろうし。そういう経験っていうのは積ませてあげたいなっていうのは、ほんとに思いますね。

社会教育にいたっていうのもあると思うんですけども、そういうような、例えば活躍する場を提供するとか、そういうふうなことは、やりたいことをなるべくやらせてあげたいっていう気持ちで思っています。

——「社会教育にいらつしやった」ということなので。町立になる前は、社会教育は高校生とはなかなか関わりを持ちにくい部分もあつたと思うんですがいかがだったでしょうか。

羽立主幹…そうですね。どちかっていうと、小学生、中学生との関わりは多かつたんですけども。それでも、全くないわけではなかつたんですよ。

——高校生が町のなかで、自分の役割を持つというのは、神社のお祭



とか、そういう伝統行事ではあったと思うんですけども。それ以外では？

羽立主幹…昔ですよね？

—ええ。

羽立主幹…自分が社会教育にいたときは、高校生が例えば、野球部の高校生が小中学生の試合の審判だとかで協力してもらったりとか。中学校のころに、その先輩方がそういうふうにしてもらったっていう繰り返しで、「自分のときもやってもらったから、後輩にも協力する」とか、そういうのはよくありました。

—そうすると、この島では、高校生の居場所というか、貢献する場所というのは、町立に移管する前もある程度用意されていたということでしょうか。

羽立主幹…小さいですけども。あとは、例えば敬老会とか、そういう高齢者のイベントとかあったら、そういう手伝いとかにもよく高校生、中学生が来てくれてたんですよ。

—そうなんですか。そうしますと、町おこしワークショップとか、あるいは、O・Dでしたっけ？ オクシリイノベーション事業部みたいなことは、町にとっては「いきなり高校生が来たぞ」ということではなくて、ある程度慣れていたというか……？

羽立主幹…今は、自分たちで発案してやるんですよ。

当時は自分たちの発案っていうよりも、地域、例えば自分が社会教育にいたときは、高齢者が「若い人と交流したい」とか、「子どもも孫もみんな遠くにいるんだけど、そういう孫の世代の高校生とかとちょっと話したい」とか、そういう要望があったりとかして、そこを結びつける役割というのを社会教育でやってたんですよ。

ただ、そこで経験してもらって、例えば「次のイベントも参加したいんですけど」とかっていうような声をもらって、ちょっとずつ活動を広げていったっていうようなかたちでした。

今は高校生は自分たちでやることを、自分たちで考えてやっている感じですよ。だから、今と以前とはちょっとタイプが違うような気がします。

4 高校生には完璧な提案を求めなくてもいい

—なるほど。「タイプが違う」というか、変わってきた」という話でしょうかがしたいんですけども。

「町おこしワークショップも最初のころは、何も知らないで話を聞くだけだった」というふうにも聞いています。それがだんだん、疑問を持ちたり提案をしたりするようになってきます。多分、まだ町の大人から見たら、「それは現実離れしてるね」というふうなことになると思えます。その辺、現実離れしないで、町の実情とか、町の生態系とかを理解したうえで、自分たちのできることを、あるいは、町とすることができることを提案していくのが最終形の一つかなと思います。



「そういう最終形でいいのか」ということと、「その最終形になるために、町として、あるいは、地域政策課として、何かサポートしていくとしたら、どんなことがありますでしょうか」という、二つの質問をさせていただきます。

幅口主幹…多分、別に突拍子がなくてもいいんだと思うんですよ。

——突拍子がなくてもいいのですか。

幅口主幹…うん、別に実態にそくしてなくても、自分たちが思ったことに対して率直に問題を提起するというのが必要だと思います。

ただ、その幼さは、これから経験していくしかないかなとは思っていますけど。だから、問題の発言と発表の仕方はいいと思いますし。別にそれで、町のために提案するっていうのを、僕、教育に携わったことがないので、高校生に求めているのかわかって。僕も実は、同じようなイメージを持つてるんですよ。

多分、発案もあっていろいろかたちにはなってきたけど。なんかちょっと理論が幼なかつたりとか、ちょっとデータに基づいてないものを結論に持ってきてきちゃったりっていう幼さはあるんだけど。だけど、そこを高校生に求めちゃっていいのか。僕、これが多分、大学生だったら、そこら辺のものはきちっとしたものができてくるんだけど。

彼らの、今のところの教育的な位置づけにおいて、そこまできちっとしたものや彼らに作らせなきゃならないのかっていうのが、まず一つのその最終形に対しての答えなんですけど。

——「高校時代に完璧なものをやらなければいけないということではない」ということでしょうか？

幅口主幹…うん。そこは、これからやっていって。ここを基本にして、「おもしろいね」って興味を持っていって。それから知識を蓄積していけば、最終形になるものはできるんだけど。そこを彼らの年代の三年間で、そこまでのものを求めなきゃならないのか。それであるならば、幼いけれども、僕たちじゃ全然気づけなかった視点から、突拍子もない意見をもらってた方がいいのかなって。

いや、僕も最初、こっち側に来たときに、提案してもらったものを見たんですけど。やっぱり、僕たちみたいな外で経験したもののからすれば、幼いんですよ、議論が。だから、「そのまま町の施策に展開しろ」っていうかたちは難しいと思います。

ただ、そこで今にいたったのは、「彼らはまだ、大学生じゃないからな」って。本来であれば、データと理論に基づいたもので提案してくれたら、すごくうれしいけれど。それを、高校生に求めていいのだからかっていうのは、今ちょっと感じてきているところですね。「あれだけの部活を使ったんだから、ちゃんとしたものをつくれ」っていうのは、当初は思っていたんですけど。なんか、そんな気はしますね。

それよりも、自分たちの足とか目で稼いだ情報で、それを疑問に思ったことを素直に発表できるっていうことの方がいいかなっていうようなことが、今の自分の考えとしてあります。

——羽立さんの方で何か？

羽立主幹…自分もちょっと近い部分あるんですけど。やっぱり、いろいろ考えてくれているのはわかるんですけど、じゃあ、現実問題とすぐに結びつくかっていったら、結構現実離れしているっていう部分はあります。ただ、いろんなものを考えて、そういうふうな解決に結びつけられる考え方とか、そういうのは、今やっていることっていうのは、将来むだにはならないと思うんですね。

だから、「ほんとに現実課題と向き合ったときに、どう解決していくのか」っていうのは、問題解決力っていうのは、多分今から積み重ねてやっていくことで、将来例えば、自分は就職したときとかに役に立ってる知識だと思います。

今やっていることが、じゃあ直接地域にすぐ反映できるかとか、そういう部分は自分たちもあんまり考えてはないですよ。ただ、この奥尻の高校生として、やっぱりそういう問題解決力と例えば、自分はその環境に合わせられる適応力っていうのか、っていうのは、その問題解決力と適応力をここの高校で高めてもらいたいっていうのは思うんですよ。

やっぱり会社に入ったら、もつと理不尽なこともあるだろうし。そこで、どれだけ「すぐ辞める」とかじゃなくて、適応していけるかとか。将来苦労しないために、そういう能力を高めてもらいたいっていうのはあります。

幅口主幹…そうですね。ほんとに、自信持たせるために、もう提案あったことをかたちにしてあげたいとは、気持ちがあります。かたちにしてあげると多分、自信持って、もつとこのめり込んでくれるとは思っています。

幅口主幹…がんばってる人を応援するのは人間の本质として、当たり前のことですから。そして、そこにいたるまでの人間の成長に時間がかかることは、みんな身をもって知っているわけですから。そういう感じで思っています。

——今、高校と地域政策課とは、どんな関係をお持ちでしょうか？
フォーマルなもの、インフォーマルなものを含めて。

幅口主幹…基本的に、僕の前の担当がやってたんですけど。

奥尻高校さんの方で、離島ならではの問題で、「遠征費にお金がかかる」っていうことでクラウドファンディングをやったんですね。そこら辺のところから、高校と付き合い合っていくことになっているとは思わんんですけど。

当然、「遠征費なんていうのは、昔からかかってくる問題、どうしようか」っていったところに高校生が自ら、稼ぎにいくって、外の収入を取りに行くっていうことに対しての、発想もすばらしかったでしょうし、「私たちがやるよ」っていうところの自負心もすごいと思いましたので。そこら辺から多分、付き合いはしているのかなって。

その付き合いがあって、今クラウドファンディングやったんですけど。その流れってというのは、またTシャツを売ったりタオルを売ったりっていうかたちで。その販売形態が変わってきているなかでの、「やる」っていったときに相談されれば、「こういうのもいいんじゃない」っていうアドバイスをしたりとかっていうかたちのつながりは、今ところ出てきていると思います。

それが縁で、何かあったときに話をして。月に何回かとか定例とかっていう話ではないですけど、何かあったときに、また顔合わせたときに、いろいろ話をしたりっていうのは。特に、行政に持っていくときの報告の仕方とかってというのは、多いかなあと。

その成功体験じゃないんですけど、何かやったときの報告って、できれば、町長なり副町長なりのとこで発表させてあげたいなっていう思いがあって、その場面を設定します。そのときに、「こういうような説明の仕方の方が、わかりやすいよ」っていうようなのを、つながりとしてやってる感じですかね。

——昨日、高校生へのインタビューの中で、「書類が作れるようになった」と言っていました。

幅口主幹…そうなんですか？

——「申請書も報告書もずいぶん書けるようになった」と実感しているようでした。

幅口主幹…そうですね。

——多分、そういうところで、達成感を感じられると、実際の企画が失敗しても、ポジティブにとらえられると思います。そういう意味では、生徒はすごく成長してるのかなと思います。

幅口主幹…そうですね。その失敗から何を学びとるかかっていう



のが、成長の過程で必要なときで。」というような計画と、どういような思いがあつてこれを作ったんだ」っていうものと、それでうまくいかなかったときに考察する時間つて絶対必要だと思つたので。

——そうですね。

幅口主幹…うん。で、そこに必要性を感じてくれたら、こちら側もううれしいなと思いますけど。

羽立主幹…「高校生と、じゃあどんなつながりがあるか」っていうと、例えば、職場体験の受け入れだったりとか。あとは、祭を自分たちで運営するんですけども、そういうところでの高校生との関わりとか。あと、イベントだと、マラソン大会、奥尻で一番おっきいムービーライトマラソンとかあるんですけど。そういうような部分での関わりぐらいで。個人的には結構、関わりつていのはあるんですけど。行政、この仕事としての高校生との関わりつていのは、そんな多くはないですね。個人的には、「島おや」っていうのがあつてですね。

——なぜつてるんですか？

羽立主幹…ええ、島おややっていて。家に、高校生遊びに来たりとか。今年から、島おやつていふのをやってるんですけど。担当しない子ども家に遊びに来たりとか。そういうので、いろんな話は聞かせてもらう機会は、多いんですよ。

学校の文句もあれば、いろんな相談とか、「こういうの地域でちよっ



とやってみたいんだけど、誰に相談したらいいの？」とかっていうのは、個人的には聞いたり答えたりはするんですけど。仕事としては、祭
職場体験ぐらいなのかなと思いますね。

5 やっていい良かった点

——次に、「ご苦労されている点」、あるいは「やってよかった」とい
うポジティブな点とか、「こういうところが助けられてるな」とか、そっ
ちも含めてポジティブ、ネガティブで、今後の課題を？

幅口主幹…やっぱり、その世代と触れ合えるだけで、エネルギーと
かを、なんか気持ちが前向きになったりとかする部分と。なんか、彼
らの持つ健康さとかが、そこをそうさせるのかもしれないん
けど。

まずは、メリットでしたっけ？

——ええ、ポジティブなところとネガティブなところで。

幅口主幹…やっぱり、自分ない気づきをくれたりとか、「ああ、この
世代はこういうふう考えるんだ」とかっていう、自分ないものを
教えてもらってるかなっていうのが、すごいポジティブなところ
よね。

ネガティブっていうと、これはどうしようもないことなんですけど。
今まで、学校と交流したことがないので、どう触っていくか。多分
お互いの思惑があると思うんですけど。教育は教育サイドの考えとか

決まりとか、いろいろな難しいことがあって。

あと、知事部局的には知事部局なりの、今までの仕事のやってたスタンスがあるので。ここをうまくかみ合わせれば、ちょっとお互いのことをまだ知らなすぎて。どこが教育側で苦労されていて、どういうようなかたちで持っていけばいいのかっていうのが、一番難しいかな。

例えば、「物を売りたい」っていうところであるのであれば、知事部局からいえば、いろいろな今までやってた物販の経験とかもあるんで、そのツテを使ったり、ノウハウとかを教えたりとかするんですけど。そこをなんか誘導っぽくしちゃうのも嫌だし。

「それでやる」ってなったとしても、今度教育現場的にもいろいろな保護者との関係とか、先生間との関係とかいろいろあると思うので。一概にパッと入っていきづらくなっていうのは、すごく感じています。それ以外のデメリットって、あんまりないと思います。

——「物販のツテやノウハウをお持ちだ」ということで。ところが、教育には教育の生態系みたいなものがある。それを、ビジネスの論理に合わせて、生態系自体をビジネスの論理に合わせてしまうというような、そういう発想でやっているとこもあると思うんですけども。

幅口主幹…それが、「学校サイドとしてオッケーだよ」って出してくればやれるんですけど。そのオッケーなのかどうなのかという、町としての関わり方ですね。

——例えば、私の知ってる範囲だと、ビジネス用語をかなり使って指導する学校もあります。で、これってこれまでの学校教育になかった

言葉だよなというふうに思いますけども。

そういうのはどう思われますか？

幅口主幹…僕はそれ、学校が望むのであれば、協力の仕方がいろいろあるんで。僕は全然、問題はないと思うし。学校が望んで、そこに生徒さんが望むのであれば、そっち側の方で協力していくべきだと思うんですけど。その学校の、「こういうことをやりたいんだ」っていうのを、待たなきゃならないのかな。そこがちょっとはがゆいよねって。

多分、いろいろな教育サイドのルールとかがいろいろあって。そこが、それがわかれば僕たちも入って、「ここ、こうクリアできれば、こういうことできるよね」とかって、こっちからの逆提案がしやすくなるんですけど。

で、「ここをもっとこういうふうやって、こういうふうに見えるんなら、ここをもっと改良できるよ」とかっていうのは、アドバイスはできるとは思うんですけど。

そのアドバイスを、ダイレクトでやっていいものなのか。「なんか、有力者から言われたから、やらなくちゃならない」というような、義務感を生ませるのも嫌だし。

——そうですね。

幅口主幹…うん、そこがちょっと、どうやって付き合っていくのがいのかっていうのは、これからの模索なんだろうなと感じています。

——高校と、これからそういうところで「コミュニケーションを取られ

ていくとどうですか？

幅口主幹…はい。というか、そうしていかないと解決はしていかないだろうし。

うちもやっぱり、若い力とか若い視点。そして、「あわよくば、そのまま残ってほしい」という打算的な考え方もありますし。

多分、教育は教育サイドで、「こういうことを町にやってほしい」という部分があると思うので。その調整をどうしていくかかっていうのが、これからの課題かなと思います。

—そのところが、おもしろいところでもあると思います。

幅口主幹…まあ、未知のことですからね。教育と知事部局との垣根がなくなっていけば、やりやすいんでしょうけど。今まで、結構接点のないところだったので。

—そうですね。

幅口主幹…うん。おもしろいなとは思いますが。そこまで、教育の素人が入っていったいいのかなとか。

—個人的にはいいと思ってます。学校は「今、あの子がこつだから、こういうふうにしてるんだ」みたいなことがあります。町の人が生徒ひとりひとりの学びの過程まで入っていけるようになる、教育がおもしろいことになると思います。

羽立主幹…自分は、正直楽しい。高校生と接する機会っていうのは、すごく楽しんでます。新鮮だし、実際にやって楽しんでますね。

特に苦労っていう、子どもたちに対しては、そんな苦労とかはないんですけど。ただ、一つ気になるとすれば、学校が目指してるようなものと、自分たちがやってるものの方向性が合ってるのかどうかっていうのが不安になるくらいで。子どもと接しているぶんには、全然普通。こっちとしても楽しんでますし、高校生にも楽しんでもらえたらそれでいいかなっていう。気を使っているのは、あとは、話しやすい環境っていうのをつくってあげるといことくらいかなと思う。

あんまり、島おやもそうなんですけど。「これをやらなきゃならない」とかっていう考え方があんまりないんですね。だから、普通に会話しながら、「ああ、こういうことやりたいんだったら、じゃ一緒にこういうふうにやろう」とか。自分も、ほんと楽しみながらここに。

職場体験なんかも、こっちが楽しみながらやってたと思うんですけど。嫌々やってるっていうことは、全くないの。

—今日はお忙しい中、ありがとうございました。

報告⑨

(特集)各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(下)

島の観光産業の変化と島唯一の高校(奥尻島観光協会)

青山学院大学 樋田 大二郎

奥尻島観光協会の井口和弘事務局長に対してインタビューを行った。

奥尻島では、二〇一九年三月末日に、島で一つしかない大規模宿泊施設の「奥尻湯ノ浜温泉ホテル緑館」が閉館となった。これにあわせて、奥尻島への二つのフェリー航路、奥尻江差航路と奥尻せたな航路のうち、後者が休止となった。これらのことが奥尻島の観光業に与えた影響は大きい。発地型観光旅行の団体客が減少し着地型観光の個人客の呼び込みが求められるようになった。

発地型観光旅行はマスツーリズム時代に多く見られた旅行の方法であり、都市で人を集めて観光地に送り出す送客型ビジネスである。これに対して着地型観光旅行は着地側で旅行商品をプロデュースする現地集合・現地解散が基本の形となる集客型ビジネスである。後者は体験・交流・学習が目的になることが多い。地域のNPOや観光協会、ボラ

ンティアガイドなどの果たす役割が重要となる。インターネットにより着地側から旅行者に対してダイレクトに情報発信する。

インタビューでは、こうした観光業の動向の中で、ボランティア、企画提案、SNSでの発信など、高校生が着地型観光の活性化の取り組みに協働していることが分かった。地域学校協働では、生徒たちは着地型観光に関して、町おこしワークショップの観光班、ボランティア部、インターシップ生が観光協会と協働して島を盛り上げている。

奥尻高校が町立移管する前は、観光面での地域高校協働はしておらず、そもそも観光協会からは高校に対して働きかけはしていなかったとのことであった。町立移管後は、奥尻高校のほうから皆さんと一緒に島を盛り上げていきたいというようになり、町おこしワークショップも町立になってから、じゃあということが始まった。高校生

は高校生ならではのアイデアとボランティアとしての協力があるということであった。

井口和弘事務局長によると、「何やるにもイベントっていうのは結構ボランティア」という状況の中で、商売をしている人とは違う参加形態の高校生に助かっている。若い人の意見が聞けること、そして近年、(個人客の増加とともに)重要な発信手段となっているSNSを使っての情報発信をしてもらえる。

井口事務局長は、高校生が将来Uターン、Sターンして定住人口となること他に、卒業生の関係人口化についても考えており、そのための取り組みをしたい、と話した。

観光産業から見た地域人材に必要な資質、そしてその資質を主体的に育てるための配慮について、とても貴重なことを教えていただきました。お忙しい中、お時間をいただき、ありがとうございました。

1 観光産業の活性化

——観光に関わっての地域活性化の状況はどんなふうでしょうか？

井口和弘事務局長…観光客が入ることで漁業がうるおうことと、あとは宿泊業とか、土産屋や各種飲食店の活性化につながると思います。通常の商店でも、民宿、旅館、飲食店等からの仕入れもありますので、その部分で大きく観光客が増えることで、活性化につながると思っています。

います。

——島の人から、この島は二〇一九年に島唯一の大規模宿泊施設である緑館さんが閉館されたことで団体客を呼び込むのが難しい状況になっていると聞きました。団体で来る人よりも個人で来る人の方が多くなってきているという観光客の変化っていうのもあるんでしょうか？

井口事務局長…そうですね、団体のお客様が来るのはほとんどが緑館で、団体バスも年間で一五〇台前後来ていました。九割方が緑館でした。緑館閉館の影響は大きいです。

——そういう中で私がインターネットで見た印象では、自転車とかトレッキングとかの個人客を対象とした情報発信をしていたように思います。

井口事務局長…そうですね。はい。

——それから民宿の女将さんが親切だったとかそういった発信もあって、団体客用とは違うPRをなさっているというふうに見えました。

井口事務局長…そうですね。今言ったサイクリングのツアーとかですね、桧山管内の瀬棚、江差含めた部分で協力していくような形です。

2 高校と協働すること

——そういった中で、高校生と協働する可能性とか利点はどんなことになるんでしょうか？

井口和弘…そうですね、実は私、奥尻高校さんの町おこしワークショップの観光の班を担当しています。町おこしワークショップだけでなく、部活動もいろいろ分かれて、観光ではなく祭りの部分なんですけど協働しています。八月三日になべつる祭りありまして、高校生さんにアイデアを募って、お客様が喜んでくれる企画を立てていただけないかっていうことで奥尻高校さんにアイデアをいただきました。そういうような形で協力しながら島を盛り上げていただけてるんです。

——健康なんとか…の企画ですね。

井口事務局長…そうなんです、いろいろ三つくらいアイデア上がってきたんですけど、祭の実行委員会では足つぼりレーを選ばせていただきました。

——高校生じゃないと考えられない。

井口事務局長…そうですね。私も祭りを何十年も続けているんですけども、どうしてもやるのが例年同じになります。この機会に若い人の意見なんかも取り入れてっていうことで、はじめてそういうような形でやってみました。



——高校生が参加協力するっていうのは観光協会さんにとっては、どんな評価になっていきますでしょうか？

井口事務局長…ほんとにうちらが全然思いつかないアイデア出していただきました。その他にマラソン大会も開催しておりますが、ボランティアの部分で、一生懸命やっていたり、祈漁太鼓も奥尻高校さんで披露させていただいております。

——それはなんですか？

井口事務局長…祈漁太鼓です太鼓ですね。

——これは町立になる前からですか？

井口事務局長…いやなってからですね。

——町立になってから、協働のネットワークが良くなったと言ったことでしょうか。

井口事務局長…良くなってると思います。

——町立になるまでは、そついつことは難しかったですか？

井口事務局長…そうですね、難しいっていうかこっちからお願いして

なかった部分もいろいろあるかと思うんですよ、

奥尻高校は皆さんと一緒に頑張っていきたくんですけど。町おこしワークショップも町立になってからじゃあということでした。

——今回の観光祭りの高校生企画はこれは高校生の発案ですか。

井口事務局長…町おこしワークショップの時に、私の方からマンネリ化してるんでなんか高校生のアイデアないですかって持ちかけてるのもあるんですけども。

——高校生の「ノリ」は良かったですか。

井口事務局長…いいですね。そして一生懸命でした。

3 つれじふこと

——実際に協働してなにかをする段階で苦労されるのはどんなことがありますでしょうか。運営していく際の配慮とかいろんなことがあると思うんですけど。

井口事務局長…まあいろんなことがありますよね。まず何やるにもイベントっていうのは結構ボランティアなんでね。高校生と一般の方のうち、一般の方は自分の商売やっているので、それでボランティアア



てなると商売の時間を割くのは非常に厳しい部分もあります。しかし、高校生はそこまでの厳しさはないんです。

——高校はこいつったことに前向きな感じですか。

井口事務局長…前向きですね。生徒も先生も。

——高校とは、町おこしワークショップ以外のことで、コミュニケーションをとるような場所はあるんでしょうか？

井口事務局長…高校は特にはないです。先生とも特にはないです。ただインターシップは、毎年受け入れしていて、いい例だと今一人うちの職員、今年初めて奥尻高校から新卒で観光協会の職員になりました。それはインターシップを経たことでした。

——それでは苦労されてることの裏返しで、良かったこと、うれしいことはどんなことでしょうか。

井口事務局長…若い人の意見が聞けることと情報発信してもらえるところです。高校は今すごい授業してらんでね、そういうSNSなんかも。高校生はパソコンを使っていろんな情報発信をしています。

——高校生がSNS使って発信されたりもするんですね。

井口事務局長…するんですね。はい。

——高校生がSNSで発信するというのは、島のことを知ってもらおう意味でそれから島に来てもらうのに効果的ですか。

井口事務局長・効果的ですよね。はい。今回も祭りなんかでもFacebookでこれちょっと見たよって。こういう例えばテレビでなんかも紹介されこういうゲームもあるんだねっていうそういうふうには。

広まりますね。すごいですね。SNSってというのは、結構いろんな口コミが広まっていくんですけど。

4 インタビュー項目終了後のフリートーク

——その他、井口さんの方で高校生との協働について、なんかこういうこと見たらいいんじゃないだろうかとか、こういうことを考えた方がいいではないかということはありませんか？

井口事務局長・難しいな。今、実はですねご存じかと思うんですけど、奥尻高校は島外から募集されています。で、三年間はここにおいて、そのあと島を出る生徒数はすごい多いですよ。なんとか島に居た子供たちがなんらかの関わりですつと繋がりがあればいいと思います。そうすれば島の活性化があるのかなど。もちろん、ここに残っていただければ一番ありがたい。そういう部分でうまく島外生が三年間だけじゃなくその後も住んだり関係を続けていくようになる取り組みが出来ればいいなと思っています。

——高卒後すぐ就職というのは難しいと思うのですが、一旦外に出て戻ってきて起業や承継するような、そういうようなチャンスはありそうですね？

井口事務局長・なかなかそういうのはねえ。本来ならば今いる高校生の例えば漁師になりたいっていう子も一人か二人いるんですけど、なにせ現状は漁業は、失礼なんですけどかなり厳しい状況にあるんですね。

——魚の様子が変わったという話を聞きました。

井口事務局長・ですね。イカも取れなくなったり、ホッケとかも取れなくなってるんで。本来ならそういうのも子供たちが残っていただけけるようなそういう環境作りしたら良いのですが。民宿旅館なんかもやはり今、後継ぎがいなくて苦戦してるところがあります。下手したらあと五年たつたらもう今の代で終わっちゃう民宿旅館なんかもあります。うまくそこをなんとか継ぐ人とかいればほんとにこちらもありがたい、逆効果になるんですよお客さんが宿泊する場所がないっていうのがですね。

あと島には大きな企業もないし、就職する場所っていうのはなかなか、ほんとに公務員くらいしかありません。ほんとに何らかの形で、いいアイデアを出して、起業できるような。

——観光が着地型に変わりつつあって、個人がここに来てさあ何をしよって……。

井口事務局長…しようって。そうですね。まあいい例が、外部から来た方が移住されてきて神威脇（かむいわき）地区に住んで民宿と、アウトドアのカヌーとかSUPってサーフボードに立って乗るような形で本格的な海の体験型をやってるんですけど。ただ、期間が決まっていますのでね、冬がちよっと厳しいからその対策も必要に思います。

— 団体客でない立場からすると神威脇っていうのは、ワイナリーもあるし温泉もありますし、北追岬もある。結構魅力があるところだと思いますんですけど。そういうところの魅力を例えば若い人が、うまいこと発信してもらえないものでしょうか。

井口事務局長…そうそうそう。そうですね。

— 神威脇の町営温泉のおじさんが、緑館のお湯よりもうちのお湯の方が良いと言っていました。

井口事務局長…お話をされたのですか。

— 夕日を見たいと思って、二日間通いました（笑）。

井口事務局長…おそらくあの温泉から緑館の方にひいていただけでも、味のある温泉で。

— 新しいタイプの観光は、若い人がやってくれるでしょうか。

井口事務局長…今は、ほんとに体験体験となってます。厳しいって言ったらたからおかしいですけど、さっき言った通りシーズンが短いので、ほんとに冬の体験ができるようなそういうのがあればいいのですが。自分としてはそういう体験があったらいいなとおもいますが、それを誰がやるんだってなるとねえ。その部分はちよっと難しい部分は。まあ果たして温泉だけで人が来るのかとかね。

— 町がいろいろアンケートとってますが、奥尻に定住する理由は、やはり一つは就職による部分、職なんですよ。あと自然鑑賞っていうか景観見に来るっていう。自分としては職の方でうまく取り組みが出来ればって、まあ今漁業の青年部ってあるんですけど。

— 今日はお忙しい中、ありがとうございました。

報告⑩

(特集)各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(下)

東京でカフェ巡りの生活をして奥尻でカフェを開店した(カフェ・ファアロー)

青山学院大学 樋田 大二郎

カフェ・ファアローの禿(かむろ)あゆみさんは、奥尻高校を卒業後に上京し、三年半の東京生活の後に奥尻島に戻った。Uターンして起業した町民として、そして高校生の活動を支援している町民としてお話を伺った。インタビューは、禿さんが経営するカフェ・ファアローで行われた。

最初に禿さんが起業に至るまでの経緯を伺った。禿さんは、高校卒業後に東京で就職している。東京への憧れがあったという。しかし、いずれは島に帰ってくるつもりでの東京生活であった。

自然がないのもうわかっていって、永遠に東京に住むわけがないと思って。それはもうわかって行ってたんで、どうせだったらこう、もういろんなもの吸収してやろうと思って。本当にい

ろんな、なんだろう、まずここではできないようなことばかり。お店だったりもそうだし、仕事も、都会ならではのものをたくさん見させてもらいました。(インタビューより)

地方郡部で起業したり、仕事を承継するとき、新しいスタイルを持ち込むのではなく従来の地元のスタイルをそのまま継続するのでもなく、従来のスタイルを少しずつずらすといいとされる。そしてそれをできるのはよそ者でもないし生粋の地元民でもなく、「地域内よそ者」だという(樋田有二郎 二〇二〇)。まさに、禿さんは地域内よそ者であり、地域を知り地域外での経験を地域で生かすことができる人であった。

禿さんは喫茶店の空間が好きで、大変苦勞してカフェ・ファアローを

開店した。開店までの苦勞から、奥尻島の活性化には起業を支援するシステムの充実が必要だと感じている。なお、少しずらすことにかかわっては以下のように地域のニーズをもとに、都会で得た感覚を加味するという工夫をしているという。ファアロは、一見、東京のしゃれた町のカフェと同じ作りだが、実は近くのご老人が気楽に過ごすことができたり、子連れのグループが集まることのできる個室があったり、そして地元の人が勉強会を開くことができるように設計されている。ファアロの意味は灯台であり、幼い頃に祖父と灯台の近くを歩いていたという。店内には灯台の写真が飾ってある。自分の理想の内装を押しつけるのではなく、地元の人が使い勝手がいいように作られている。

奥尻高校との関係では、菓子作り等から奥尻高校生の地域活性化の取り組みを応援したり、高校生のアルバイトを雇用したり、実家の民宿が島留学生の下宿をし本人も「島おば」をしている。

私自身、母校っていうのと自分が中学時代、高校時代が楽しかった思い出ばかりで、そういうのもあったぶん、奥尻がより好きだっというふうになって今があるっていうふうには思っていますけど、今は、当時の恩みたいなのを今の高校の生徒さんとかに返すって言ったら変ですけど、つないでいきたいっていう気持ちですね。(インタビューより)

高校生とかかわる理由を「恩返し」という言葉を使って確認したところ、そうだといいことでした。

インタビューは、カフェ・ファアロの店内で、おいしいコーヒーとケーキをいただきながらおよそ六〇分間、行われました。ご協力、ありがとうございました。

1 東京での経験

——開店に至るまでのことを教えてください。

禿あゆみさん…奥尻高校を二〇〇九年に卒業してすぐ東京に出ました。それで、結局東京にいたのは三年半ぐらいなんですけど、その間に飲食店だったり、パン屋さんだったり、カフェだったりちょっと働かせてもらって、働いてる中でやっぱり、喫茶店の空間がすごい好きで、東京にいる間はいろいろ、こう、喫茶店巡りとかを一人でよくしていました。コーヒー飲みながら、自分の地元にこういう空間を作りたいなと思って。その思いが強くて、よし、奥尻でお店を開こうと。で、帰ってきました。で、帰ってきてすぐやろうと思ったのですが、金銭面だったりなかなかうまく進まず、そうしてるうちに、いい巡り会いがあった、今の主人と結婚し、子宝に恵まれ、二人目が生まれた時点で実は一回、お店のことは諦めたんです。やっぱり子どもたちが小さいし、諦めた方がいいのかもしれないと思ってたところで、役場の方から新規事業者補助制度のお話をいただいて、やってみませんかという話をちやうど、すごく絶妙なタイミングでいただいて。家族ともちよつと話し合いして、それだったら、やってみようかっていう話をいただいて、準備をしながら、去年だから、二〇一八年ですね。で、六月二三日にオープンしたんですけど、六月二三日にオープンする前日に、三人目



を授かったことが発覚し、もうスタートは、妊娠しながらオープンして、今年の一月に三人目出産して。お店と子育てと今、とても忙しいです。

——東京ではあちこちの喫茶店を訪ねたりされていたと思うんですけど、その時期にお店を将来、開きたいなと思ったり、あるいはこんな店がいいかなということも、思いながら過ごしていたということでしょうか。禿さんのケースは高校卒業生のUターン促進的にはもう教科書のような話になります。高校時代を地元で過ごした後に都会で力をつけて島に帰ってきてという意味で。

禿さん…そうですね？

——こういう喫茶店がいいなと思っていたのは全く偶然ですか。

禿さん…そうですね、いや本当にでも、全く高校時代とかはこういうふうになるとは思い描いてなくて。もちろん、東京に出たのも、実際に奥尻でカフェを開きたいから修行しようと思っただけでももちろんなくて、ただただ都会の生活に慣れて、出てみたいなっていう気持ちだけで出てはいたんですけど。やっぱり、もともと奥尻にはいずれ必ず帰ってこようと思っただけで、何年かいてもいいかなとは思っていただけです。

——帰ってこようと思っていたのは、奥尻の自然が好きとか、家族がいるからとか、友達がいるからとか、そういうのが全部合わさったとか、どういう理由でしょうか？

禿さん…そう聞かれるとすごく難しいんですけど、漠然と、奥尻以外で暮らすっていう理由が昔から自分の中ではあまりなくて。もちろん奥尻でしか暮らしたことがなかったんで。電車もないのが、それが普通だったし、服屋さんとかもないのが普通だったし。どっちかというと私的には東京という都会で生活した時間の方が違和感。違和感っていうか、暮らしづらかったというか。

—そうすると、いずれは戻ってくるけども、一回は東京に行ってみようということですか。

禿さん…憧れですね。

2 奥尻島に必要な人材とは

—ご自身の体験を踏まえてという感じなんですけど、今後この地域に必要な地域人材というのは、どのような人材だと思いますか？

禿さん…やっぱり私みたいに、新規事業開業した者からすると、例えばそういう時に必要な書類とか、そういうものの進め方だったりをしっかりと教えてくれる人だったり、ちゃんと下のものに伝えてくれる。なんて言えばいいんですかね。伝えていってくれる人です。(自分自身の場合が)すごく、大変だったんで。

—この島では、企業の継承とか、あるいは新規事業を始める人とい

うのは少ないですか？

禿さん…少ないですね。はい。

—そういう中で、新規事業を始める、書類のことも含めて大変なところが色々あったと思うんですけど、そういうことを教えてくれる人がいなかったということでしょうか。

禿さん…はい。

—若い人同士でそういうのを助け合うような、それができるほどの新規事業やっている人の数も少ないですか？

禿さん…少ないですね。

—ほぼパイオニアの状態でなされたのでしょうか。

禿さん…はい。

3 地域と学校の協働の意義

—今、パイオニアの卵みたいな高校生がたくさんいるわけですが、高校生たちと地域が関わる、地域が高校と協働することというのは、地域にとってはどんな意味があると思いますか。生徒にとっての意味はたくさんあるかもしれないんですけど、地域にとってもどんな意味が



あると思いますでしょうか？

禿さん…んー、地域にとつて。そうですね。やっぱり私自身、今あの、留学生の島おばをやらせていただいて、うちの実家も民宿をやっている、三人ほど高校生が下宿してくれてるんですけど、やっぱり、関わる機会も多くて、本当になんでもない悩みとかも相談してくれるぐらい、ちょっと、仲良くさせてもらってるんですけど、関わりと関わらないとじゃ、やっぱり自分が、自分でこんな、高校生と関わることで、改めてこう自分が、島に対しての熱っていうか、熱をこう、再確認できるっていうか。

—それは、高校生が熱を引き出したたり、気づかせたりするということですか。

禿さん…そうですね。

—どのあたりが禿さんの島への熱を再確認させてくれることになったのか、具体例を教えてくださいませんか。

禿さん…あの、一人の子が奥尻と、今、実家が関西にある子なんですけど、高校卒業して専門学校に行ったら、奥尻に戻ってきたっていうふう言ってくれて、奥尻の漁業に携わった仕事をしたいっていうふう言ってくれて。具体的に帰ってきたらどういいう仕事をするとかっていう話をしてくうちに、だんだんこう、自分も奥尻出て東京行ってこういいうふうやって戻ってきたんだよとかっていうふう話

すと、向こうもすごい興味深く聞いてくれて。なんて言ったらいいんだろう。すごい嬉しいですね、戻ってきて奥尻で仕事をしたいって言ってくれるのが。

—— 禿さんが高校を卒業していったん出てまた戻ってきたという経験に関心を持ってくれたのですか？

禿さん…はい、そうですね。

—— 高校生は話を聞いて関心を持って、どんなことを言いましたか？

禿さん…うーん、その子は奥尻に戻ってきてからの具体的なことは決まてないんだけど、漠然と漁業だったり、あとお料理が好きだから、飲食店をやったりしようかなっていう話をしてくれて、もしそういう時に、開業するにあたってわからないことがあれば、教えてくださっていいふうに言ってくれて。私はもう教えますと。自分が大変だったぶん、そういう子たちにはわかりやすく自分がしてほしかったことを本当に伝えていってあげたいなと思って。はい。

—— 高校生の場合は手順をしっかりとしていない、あるいはデータに基づいていない夢とか希望とかの部分ありますよね？ そういうのと出会った時に、「そんなの現実味がないぞ」というふうにはアドバイスするのか、あるいはそれは違う形で関わっていいたりするのか、どんなふうにするんですか？

禿さん…実際にうちに下宿してる三人のうちの一人が、海外に行きたいとか言って言って。海外で仕事してみたいって、すごい漠然と言うんですけど、私は心から応援してます。行ってきなさいって。やることはやらないといけないけど。ゲームばかりやるのも、すごい周りの大人たちはすごい否定するんですけど、ゲームはダメだっていうふうには言ってるんですけど、私的には全然そんなこと思わなくて。彼の得意分野だと思ってるし。それを生かした仕事ももしかしたらできるかもしれないし。奥尻にいるのも人生のうちの一つ三年間しかないので。奥尻でもやりたいことをやって、奥尻から出てやりたいことをやんなさいと、自分がやりたいことやりに東京に行かせてもらって。そういうふうには言ってます。

—— 高校生としては怒られるんじゃないかと、そういうふうには優しく応援してもらおうと、うれしいでしょうか。

禿さん…すごい調子乗ってますね。その子は(笑)

4 奥尻高校との関わり方

—— 次の質問をさせていただきます。今、奥尻高校とはどんな形で関わっていますでしょうか？

禿さん…そうですね、島留学生の島おばっというのと、そしてその下宿先のおばさんっていうのと、あとは奥尻高校の先生たちが、時々研修みたいな形で、勉強会ですね。先生方の勉強会を夜に、夜の六時か

ら八時ぐらいまで場所を貸し切ってやってもらってる、っていうぐらいで、あとは奥高祭でちよつと協力させてもらったりしています。

——学校祭で。

禿さん…はい、学校祭で。

——その研修会をここでやるというのはどういう経緯で？

禿さん…奥尻高校の先生がここをすごく気に入ってくださって、普段そこにある奥尻町議会っていう議員さんたちの使うところで勉強会っていうか、研修をやったことがあったけど、ここだったらコーヒー飲みながらとか、フランクに堅苦しくなくできるかなっていうので、貸して欲しいって言ってくださって。あとはあれですね、今あの、イノベーション事業部っていう部活。その生徒さんたちが、うちパンも焼いたりにしてるんですけど、そのパンを函館のシエスタ函館っていう無印良品のお店で代理販売とかしてくれたりしています。

——完売してるというふうに聞いてます。

禿さん…はい、おかげさまで。

——高校とそのように関わろうと思った理由はどんなところにあるんでしょうか？



禿さん…私自身、母校っていうのと、自分が中学時代、高校時代が楽しかった思い出ばかりで、そういうのもあったぶん、奥尻がより好きだっというふうになって今があるっていうふうには思ってますけど、今は、当時の恩みたいなのを今の高校の生徒さんとかに返すって言ったら変ですけど、つないでいきたいっていう気持ちですね。

——ちなみにそれは、恩返しという言葉があるそうです。

禿さん…そうですね、そうです。恩返し。

——その高校生たちもまた、恩返ししてくれるといいですね。

禿さん…そうですね。はい、私には返さなくていいです。本当に。

——返さないでということなんですけども、高校生から「ありがとございます」とか、先生たちから「ありがとございます」というふうに言われると、ニコッとという気持ちになりますか？

禿さん…はい、嬉しいですね。

——今後、奥尻高校さんとはどんなお付き合いになりそうですか？

禿さん…続いていけばいいかと、私自身こう協力できることがあれば、協力していきたいなと思っています。

5 町立移管と全国募集

——禿さんの目線から見ると、高校が町立に移管して全国募集を始めたことをどんなふう感じていらっしゃいますか？

禿さん…そうですね、自分が高校生の時にはまずこう、九州だったり沖縄だったり、東京だったりから来た生徒がたくさんいる教室っていうのが、まずありえない空間だったんですけど。今実際うちにいる子たちは関東と関西と本土の子で、育ってきた文化だったり、しゃべる言葉だったりも違う子たちと交流するのがとっても新鮮で、楽しいです。私自身こう、こっちはこういうふうにしやべるんですよとかっていうふうに教えてもらったり、「そうなんだ」みたいな、「そういう文化があるんだね」という感じで、情報交換したりするのがすごく楽しいです。

——そうするとその、全国募集じゃなければ、あるいは、高校がなくなっちゃったら、そういう感じで話し合う、会話する相手はいなくなりますか。

禿さん…そうですね。実際今この店で土日に、うちに下宿してる関東から来る子がアルバイトで働いてくれてるんですけど、ここで働くことやったり、高校に関わってる人以外の人もコミュニケーション取ることにもなるので、それが見てて微笑ましいっていうか、良かったなと思って。

6 インタビュー項目終了後のフリートーク

— 何か私が聞いたこと以外にこういうのも大事だよとかがあったら教えていただけますでしょうか。

禿さん…私が奥尻に戻ってきてすぐの頃、自分が奥尻でこれから暮らしていくと思って帰ってきて、どうやったら昔みたいなこう、活気が戻ってくるんだろうとか、どんどん閉店していく商店だったりが多くなってたんで、どうやったらもつと観光客が増えるのかなとかって漠然と考えてたんですけど、自分でこう暮らしてくうちに、どうやったら活気が戻るとか、どうやったら観光客が増えるかっていう問題じゃなくて。観光客を呼ぶから活気が出るっていうよりも、もうここに住んでる自分たちがしっかりと生活していくことが、自分たちがここで元気に暮らしてれば自ずと勝手に活気が戻ってくるんじゃないかなと思って、ちょっと考え方がその時変わりました。自分が今ここでお店やってるのもそういうふうにした理由の一つです。

— この店のつくりを見た時に、人が集まれる場所だなということを感じたのですが、それはコンセプトとしてそういうふうにしたと思うていたのですか？

禿さん…はい、もちろん。はい、そうです。

— 実際にはどついう年齢層のどついう方が集まってきました



か？

禿さん…ああ、もう本当にありがたいことに、年齢層は広くて、奥の部屋が一応、キッズルームっていつて個室兼、一応唯一禁煙部屋なんですけど、あそこを利用するのに子連れの家族、お母さんどちっちゃい子どもだったり。あと奥尻に航空自衛隊さんたちがいるんですけど、そのご家族の方だったり、あとは本当に一人でいる男性の、自衛隊さんたちだったり、あとは近所の商店街のおばちゃんたちが、平日のお昼にこういうところ、こう使って長時間おしゃべりしたりっていうので本当にあの、バラバラです、年齢層は。あと土日になると、高校生の女の子たちだったり、男の子たちだったり、仕事終わりのコンビニで働いてる人だったり、もう本当、使い方はバラバラですね。時間つぶしの人、ご飯食べにくる人おしゃべりしに来る人、そういうふうに使ってもらえたかったので、もう、ばっちり、その通りハマってくれたなと思って。しめしめと思ってます。

——この店ができるまでは、そういうお客さんはどこで集まっていたんですか。

禿さん…あの、無かったですね。

——コンビニの前でたむろしてた？

禿さん…自衛隊さん、一人暮らしの若い自衛隊さんたちは、夕方の三時ぐらいに、自衛隊のバスで、その前から乗って山に登って基地に

行くんですけど、その三時までの時間つぶしを、みんなあのコンビニで立ち読みしながらバス待ってたり、っていうのが今は、二時半ぐらいにここに来て。三時前に出て行って、だからここで時間つぶしてきてたりっていうので、使ってくれますね。作ってくれてありがとうっていうふうに、感謝していただくことが多くて、良かったなって。

あとやっぱり自分の、子どもたちがまだ赤ちゃんだった時に、土日になつてお昼ご飯とか食べに行くかってなつても、どこ行つても、ちっちゃい子ども用の椅子とかあまりないし。個室っていうのもまずないので。あとやっぱり、禁煙部屋っていうのはなかったですね。そういうので子ども達が泣いたら大変だから今日はやめるかとかっていうふうにしてあんまり行かなかつたんですけど。ここはもう親と一緒にコーヒー飲みながら、子どもたちをマットの上で遊ばせたり、DVDとかも置いてるんで、子どもさん連れのお母さんたちには、すごい使いやすいっていうふうに言ってもらえます。

——なるほど。ところで、さきほど高校時代が楽しかったということでしたが、高校時代の楽しさって、都会での楽しさとは違う楽しさでしょうか。

禿さん…はい、全く違いますね。

——高校時代の楽しさってどんな楽しさでしたか？

禿さん…やっぱり元々自然の中で育ってきたので、まず授業にスキューバダイビングがあったり、っていうのと。

— ありましたね。

禿さん…資格が取れたり。あの、もう普段から常に自然と触れあうことが出来るのが、楽しかったですね、私は。

— 学校帰りに泳ぎに行ったりとか。

禿さん…あ、はい、そうですね。してましたね。暇があれば泳ぎに行っていました。

— そうですね。山の中に入ったりはどつでしようか？

禿さん…山の中にも入りました。

— アケビとりに行ったりとか。

禿さん…あー、行きましたね。

— そういうこともしましたか。

禿さん…今でもよく子どもたちを連れて、くわ取りに行ったり栗拾いに行ったりしてます、はい。

— そういうのをいっばいやったのに、東京には憧れたと。

禿さん…そうですね、絶対に行きたかったです、東京は。

— 欲張りですね（笑）。

禿さん…欲張りです（笑）。

— 東京に行くときそういう自然がなかったので、ちょっと寂しかったですか？

禿さん…あの、自然がないのはもうわかっていたんで、永遠に東京に住むわけがないと思って、それはもうわかって行ってたんで、どうせだったらこう、もういろんなものを吸収してやろうと思って。本当にいるんな、なんだろう、まずここではできないようなことばかり。お店だったりもそうだし、仕事も、都会ならはのものをたくさん見させてもらいましたね。

— こっちにみると、友達もいるし、おじいちゃんおばあちゃんも、お父さんお母さんも隣の人もいるし、人間関係あったかいのいっばいありましたよね？

禿さん…はい。

— 東京行って、ちょっと違う人間関係があったと思うんですけども。



禿さん…あー、戸惑いが最初すごいあって、やっぱりみんな歩くのが早くて、ぶつかったりするのにも別に平気で、誰かが転んでも振り返りもせず、なんて冷たい街なんだと思っただんですけど、やっぱり住んで、もちろん向こうの職場で仲良くなったりする人も増えていく中で、住めば都っというのとはよく聞きますけど。私はすごい人に恵まれてたなと思って、一緒に仕事する先輩だったり、同期の子だったり、本当にいい人ばかりで、今は「あ、東京に遊びに帰りたいな」とかはしょっちゅうもう。このお店のデザインっていうか、雰囲気も、私が東京行った時に、ずっと働かせてもらってたカフェを模しています。こういうメニューも全部そうです。「こういうメニューだったな」とか、こういうものを使ってたとかっていうのは、もうほとんどその時代、その働いてたところをイメージしています。

——約束の時間を超過してしまい申し訳ありません。今日はありがとうございました。

〈引用・参考文献〉

樋田有一郎、二〇二〇、「地域移動が形成する家業継承者の二重の主体性——島根県中山間地域の地域内よそ者のライフストーリー分析を通して」『村落社会研究ジャーナル』日本村落研究学会、(五二) 一一—一二。



調査概要

訪問インタビュー調査は二〇一九年九月一日～四日の四日間に青山学院大学・教授・樋田大二郎が行った。インタビュー対象者と場所は下記の通り。インタビュー内容はあらかじめ大項目を設定した半構造化されたインタビューであった。

下記のように多様な人にインタビュー調査を行ったが、その理由は地域では、地域の多様な要素が複雑に関係しており、一部を取り出して考察すること、地域の生態系の一部を取り出して地域を語ったり、地域の処方箋を書いたりすることは適切ではないからである。このことは、町立移管で地域学校協働を促進する奥尻町では特に当てはまるものと考えられる。

1. 調査対象者

『地域人材育成研究』第3号

- ① 奥尻高校 清水信彦校長、二〇一九年九月二日、於・校長室
- ② 奥尻高校 井上壮紀教頭、松原聡史教諭、清水信彦校長
二〇一九年九月二日、於・校長室
- ③ 奥尻高校生徒、北野宏志（仮名）、海野友美（仮名）
二〇一九年九月三日、於・奥尻高校図書館

『地域人材育成研究』第4号

- ④ 奥尻町教育委員会 桜花幸久事務局長
二〇一九年九月三日、於・奥尻町教育委員会
- ⑤ 奥尻役場水産農林課 満島章課長、横田稔主幹

二〇一九年九月三日、於・奥尻町役場

⑥奥尻役場地域政策課 幅口一路主幹、羽立仁主幹、

二〇一九年九月三日、於・奥尻町役場

⑦奥尻島観光協会 井口和弘事務局長、

二〇一九年九月四日、於・奥尻島観光協会

⑧カフェ・ファアロ 禊あゆみ氏、

二〇一九年九月三日、於・カフェ・ファアロ

※インタビュアーは地域人材育成研究会代表・樋田大二郎（青山学院大学）が行い、テープおこし後にインタビュアー対象者に本誌に収録する内容の確認および加筆訂正を行っていただき、さらに樋田が整理を行いコメントを付した。

※個人情報保護等の観点から、名称・地名等について、一部加工して掲載した。

※お忙しい中、インタビュアーにご協力いただいたみなさまに感謝いたします。

II. 高校訪問インタビュー項目

(1) 校長先生インタビュー

【1. 高校と魅力化（地域協働）の概要】

A. 学校、生徒、地域の状況と特徴

B. 魅力化（地域協働）の取り組みの背景・経緯

C. 魅力化（地域協働）の取り組みの今後の課題と展望

【2. 地域人材】

D. 地域人材とはどのような人材なのか、具体的な資質・能力、意識はどのようなものであるのか。

E. どのような取り組みの中でどのようにして育てるのか。

F. 取り組みの実施中の取り組み検討資料として、地域人材の育成をどのような方法で評価するのか。

【3. カリキュラム・マネジメント】

G. 地域人材の育成は、どのような授業、どのような取り組みの中で行われているのか。

H. カリキュラム・マネジメントの体制・組織と実際の運営。効果的な運営のためのポイント。

【4. 地域との協働】

I. コンソーシアムの体制・組織と実際の運営。効果的な運営のためのポイント。

J. 個々の活動についての地域との協働の組織と具体的な運営

【5. コーディネーター、地域協働学習実施支援員】

K. 配置の有無と役割

L. 高校内での位置づけ

M. 大学関係者、専門家との関係

N. 地域の人的資源の状況

O. その他

(2) 魅力化（地域協働）担当教員インタビュー項目

A. 背景と目的、誕生の具体的ななきっかけ、

B. 取り組みの組織・運営、

C. 現状、

- D. ご苦勞されている点、
- E. 生徒さんの成長
- F. 地域の変化・活性化
- G. 今後の計画、課題
- H. その他
- I. 資料があつたら、いただけますでしょうか。

- H. 今後の展望、
- I. (役場の人) 財政的支援、人的支援、
- J. その他

- (3) 実際に活動している生徒さんインタビュー項目
- A. 活動のやりがい、
- B. 自分が活動に参加して得たと思うこと、自分が変化したと思うこと
- C. 地域についての思い、
- D. 将来の地域との関わりかた、
- E. その他

- (4) 地元関係者インタビュー項目
- A. この地域の地域活性化の状況、
- B. 今後必要とされる地域人材とは
- C. 地域にとっての高校と協働する意味、
- D. あなたが、高校との協働に至った背景と経緯、
- E. 協働の体制・組織・運営、
- F. ご苦勞されている点、
- G. ご自身の変化

『地域人材育成研究』第4号の著作権の全ては地域人材育成研究会に帰属します。ただし、出典を記載してあれば、本誌の一部または全部を印刷物か電子データかの形式を問わず、複製や改変や再配布することができます。本誌をみなさんでご利用いただけましたら幸いです。

ただし写真に関しては、写真を抜き出して複製や改変して利用する場合には、北海道奥尻高等学校と奥尻町、奥尻町観光協会の許可を得ることを条件といたします。本誌に使用されている写真は、奥尻高校及び奥尻町、奥尻町観光協会から提供を受け、本誌での使用の許可を得ています。

著作権ポリシー

〈編集後記〉

『地域人材育成研究』第3号、第4号は奥尻高校を特集しました。第4号は教育委員会と町役場で奥尻高校と関わりのある職員の人、そして島内で起業した奥尻高校卒業生にインタビューした結果を報告しました。

『地域人材育成研究』第3号の編集後記にも書きましたが、『地域人材育成研究』の第一の使命は高校の現場で起きていることを生徒や保護者、高校関係者、地元のみなさんに知ってもらうことです。第二の使命は行政の担当者や研究者に自分たちが対象としていたりや行っていることの結果や意義を伝えることです。

『地域人材育成研究』が有益な情報となっていることを祈りつつ、第4号を刊行します。

最後に、編集作業を担当していただいているびーんずネットの金子さまに感謝いたします。われわれがいろいろと後出しのお願いをしてもいつも笑顔で対応していただき、ありがとうございます。これからもよろしくお願いたします。

(地域人材育成研究会代表・樋田大二郎)

4

地域人材育成研究

第4号

二〇二二年六月三〇日発行

特集…各地の高校魅力化プロジェクトを紹介
奥尻高等学校の町立移管と

高校魅力化(下)

Print ISSN 2435-3604
Online ISSN 2435-3612
ISBN978-4-910384-04-7 C3037

本誌の全文の電子ファイルは次の地域人材育成研究会ウェブサイトでご覧いただけます。
<https://rhrd.net/>

デザイン…金子あかね・金子純一
編集・発行…地域人材育成研究会



高校魅力化プロジェクトとは

その地域・学校でなければ学べない独自カリキュラム、学力・進学保証をする公営塾の設置、教育寮を通じた全人教育の三本柱で、多くの生徒が行きたい、保護者が通わせたい、魅力ある高校にするプロジェクトです。

グローバルとローカルを結ぶグローバル人材の育成、答えが一つに定まらない時代に、決断を答えにする、二一世紀スキルを持った人材を育成します。

<http://c-platform.or.jp/>

<https://miriyokuka.com/>

ISBN978-4-910384-04-7

C3037



地域人材育成研究

Regional Human Resource Development Studies

編集・発行：地域人材育成研究会

Edited by The Forum on Regional Human Resource Development

4

地域人材育成研究会ウェブサイト

<https://rhrd.net/>

2021年6月